自分で育つ

げんじあきら

目次

○自分なりの新しい考え

○おもしろいということ
自分で学習して自分で育つ

○学習ということ

○自分で学習するコンセプト

○自分で学習するお手本

○人としてあるべき姿のお手本

○自分で学習するを助けるモノ
自分で育つ

○60年くらい前のこと

○いたちごっこ

○幸福感

○自分で育つ

○自分で育つことはできるのか

不思議なことば

○なぜだか教え育む

私には不思議なことがいくつかある。
教え育むということも、不思議なことの１つである。
こんな不遜なことばがまかり通っていて、誰も替えようとしないことだ。
どうしてだろう。
私は、ずっとあかちゃんを観てきた。保育園の園長も３年やった。
どうして教育という言葉を変えようとしないのだろう。
誰かが誰かを、教え育むということばのとおりの意味で、誰でもがとらえる。
私は、ずっとあかちゃんと係ってきて、かれらは、教え育まなければならないような人ではないと思う。
これが、第１の、教え育むことの不思議さである。
教え育むことの不思議さの２つ目は、時代の話しだ。教え育むという言葉と考えは、支配者がいないと成立しない。支配者の意向を被支配者に伝えて、そのとおり行動してほしいのだ。もし子どもがいたら、幼い時から、支配者の意向を学んでほしい。これが、教え育むことだ。
２０１３年の日本では、誰が支配者なのかわからないにもかかわらず、ことばと体制と構造だけが、昔のままなのだ。君主と民の時代である。
私には、すごく不思議である。

自分で育っている

○人としてあるべき姿

たまたまだが、保育園の園長をやらせていただいた。３年間である。
『まゆ』を読んでいただきたい。
『あかちゃんからの手紙』を読んでいただきたい。
私は、どう観ても、あかちゃんは、自分で育っているように観える。
先に、人間としてのあるべき姿をはっきりさせておきたい。英語が話せることが、人間として目指すことであれば、あかちゃんは、ゼロである。小学生でも、日本の小学生は、ゼロに近いことが多い。
因数分解ができることが、人間としてのあるべき姿であれば、あかちゃんはゼロだ。
ここをはっきりさせておきたい。
私が、あかちゃんは、自分で育っていると言っていることに誤解が生じてはまずい。
富士山に登れることが、人間としてのあるべき姿だったら、あかちゃんはゼロである。
私は、こころの中の愛のシエアーが、20よりも上回っていることが、人間としてのあるべき姿だと思っている。
一般的には、すごく特殊だと思われるかもしれないが、私の考えを変えるつもりはない。
世の中の事件のすべては、人のこころの中のよろいが引き起こしている出来事である。
人のこころは、愛とよろいがシエアーしている。愛が50だったらよろいが50だ。人のこころには、他に入っているものはない。こころは、愛の器でもある。
人のこころと言うと、他にも、こころのある生き物がいるかのように思われるかもしれないが、こころがあるのは、人間だけだ。
人間は、他の生き物と同じように、遺伝子の自分がいる。後に自分を繋げる

ために生き残ることだけをコンセプトにしている。
人間には、もう１つ、優秀な頭脳としての自分がいる。これは、人間以外の他の生き物にはない。
優秀な頭脳があるから、人間は、地球でチャンピオンになった。優秀な頭脳のコンセプトは、わからないことがあったら解き明かすことにある。
この優秀な頭脳のコンセプトは、思いの外、すごいものだった。地球を爆破するかもしれないことまで考えついてしまう。生き物を構成している基さえも明らかにしたがる。
人の優秀な頭脳は危険である。
カミサマだろうが、優秀な頭脳にブレーキをかけるために、優秀な頭脳を滅ぼす役割を持った見えざる悪魔と、優秀な頭脳をコントロールする愛の、２つの機能を人に与えた。
見えざる悪魔は、人間社会がはじまって以来、人も人が構成する集団も、みんな滅ぼしてきた。優秀な頭脳が行き過ぎようとしたことは何度もあったのだが、見えざる悪魔が、滅ぼすことによって、優秀な頭脳にブレーキをかけた。
見えざる悪魔は、それなりに役割をはたしている。大局的には、そうだ。
しかし、ずっと、人間が行っている戦争も、見えざる悪魔が引き起こしていることで、悲しい出来事が多い。人には愛があるから、こころが痛む。
愛は、おかしなことなのだが、自分の優秀な頭脳をコントロールしないといけないのだが、その前に、自分と同じ役割である、見えざる悪魔に、自分が滅ぼされる宿命を持っている。
愛は、見えざる悪魔とも戦わなければならないし、優秀な頭脳のブレーキの役割も果たさないといけない。
見えざる悪魔は、フツウは、よろいに姿を変えていることが多い。
これが、私の、人のあるべき姿の背景である。
私の、人のあるべき姿は、こころのシエアーが、愛が大きくてよろいが少ないことだ。
私は、世界共通に、フツウの人は、愛が20によろいが80になっていると思っている。
残念だが、人は、集団で生きなければ弱いから仕方ないのだが、集団で生き

ることが得意ではない。だから、こころの愛のシエアーが少なくなる。
こころの愛のシエアーが80によろいが20だった人は、ブッダの他には、２人しかいない。
「あなたが幸せになることがわたしが幸せになることだ」
恋人にでも、演技で言ってしまいそうな、こんな言葉を、平気で実行する人が、愛が80によろいが20の人だ。
愛が50によろいが50の人でも、こう言うかもしれない。
フツウの人である愛が20によろいが80の人は、「私が金メダルを取るためにあなたはいるんだからお願い」と言う。フツウは、これで、おかしくはない。だから、フツウの人は、人間としてのあるべき人になれない。
「私が次の選挙で当選するためにあなたはいるんだからお願い」
違和感もないのだが、私には、すごく不思議なのだ。みんなよろいが大きいのだ。
私は、選挙で当選することを、単なるよろいと言っている。ホントは、隣のおばさんである自分を見失わないようにした方が好ましい。しかし、フツウは、選挙で当選したら、隣のおばさんにならない。
ワルク言っているのではなくて、これが人間のフツウだと言っているだけだ。
こころの中の愛が20以上でよろいが80以下の人が、あるべき姿だと言っているのは、これが、生き物の、しかも人間の本質だと思っているからだ。
「私が次の選挙で当選するためにあなたはいるんだからお願い」
こうして、もし代議士になったとしても、それは、単に、特徴に過ぎない。特長でもよい。その人の人間としての本質が変化したわけではない。
その証拠に、次の選挙で当選しなかったら、元の隣のおばさんになってしまう。
よろいとは、こういうものだ。
あかちゃんは、よろいがゼロである。そういう意味では、ブッダの80よりすごいのだから、あかちゃんは、人間のあるべき姿の究極だと言える。
あかちゃんには戦いはないし競争もない。
「隣のよっちゃん歩いてるけど」
１才になってお母さんに言われるのだが、そんなことはどうでもよい。よろ

いがなかったら嫉妬など生まれない。あかちゃんは、究極の人のあるべき姿なのだ。
あかちゃんは、確かに歩けないし自分でごはんが食べられないから、人間として未発達である。しかし、人間のあるべき姿では、究極の人なのだ。
これはどういうことだろうか。
人は、生まれて以降、大きくなるに従って、醜いものを身体に着けていくことを表わしている。
例外などない。
よろいは、人の醜さである。
人は、ながく生きていると、よろいが厚くなるようになっている。ところが、時には、ながく生きていると、人間のあるべき姿に近くなる人がいる。ブッダのような人だ。
人は、これを修行という言葉で表す。
練習ではない。鍛錬でもない。
人は、あかちゃんの時から年を得るごとに、人間らしからぬ生き方をすることが、フツウである。

○ずっとあかちゃんを観てきた
私の、人としてあるべき姿は、このようなものなので、一般的な、すごい人とは異なる。オリンピックで金メダルをもらったり、偏差値が最高の学部に入学できたり卒業したりとは異なっている。
そのようなことは、人としてあるべき姿ではなくて、その人の、単なる特徴である。特長でもよい。スキルである。
もし、人としてのあるべき姿が、オリンピックの金メダルであったら、私の今からの話しとは、ズレてしまう。それは仕方がない。
教え育むが時代遅れで古臭いという概念以前の問題である。
私は、どんな人になりたくて生きているのかという問題だから、そんな難しいことは、考えてないかもしれない。
しかし、こういうことは、考えて答えを出すようなことではない。
私は、ずっと、子ども達を観てきた。

子ども達は、人としてのあるべき姿に向かって、自分で育っていると思う。かれらは、最初に、胎盤を自分をコピーしてつくることからして、自分で育っている。育った先は、人間としてあるべき姿なのだが、そこに向かうためには、身体が大事だ。健康が大事だ。かれらは、自分で身体をつくっていく。
お母さんが、育てているからでもない。
ただ、お母さんから栄養をもらっているというか奪っている。
お母さんは、何もわからないのだが、かれらは、自分で完璧に育つ。そして出産のサインさえも、お母さんに送る。
何から何まで、自分でやる。
あたりまえではある。お母さんとかれらは異なっている人だから。
生まれてからの１年間は、お母さんが完璧に守ってくれるから、歩くことだってできないようになっている。狼が来ても逃げようがない。
２０１３年では、１年間は、完璧にお母さんが守ってくれると、生まれる前に教わっていたのだが、どうも、そうでもないらしいことが起きている。
お母さんは、かれらのことだけにかまってはいられない。自分が生きることにも必死なのだ。
しかし、幸いなことに、生まれる前に教わっていた、生まれてすぐが危険だということが、少し違っていて、安心できる。日本のあかちゃんのことだ。
ますますお母さんは、かれらのことについて、何もしなくなった。オムツ替えをしたり風呂に入れてくれたり、世話はする。
お母さんは、かれらが、おっぱいから食べ物を食べる口に構造を変化させることに苦労することさえ知らない。
１才になって、驚いたことに、お母さんとお父さんは、歩く練習をさせたがる。よくわかってくれていない。かれらは、自分で育つようにできている。歩くことなどは練習などいらない。
お母さんがキレイに歩いていて欲しいだけだ。かれらは、お手本がないと学習できない。かれらが自分で育つようになっているのは、自己学習のチカラを、生まれながらに持っているからである。
だから、歩き方が、お父さんに似ているなどと言われる。遺伝子のせいではなくて、お父さんの歩き方を、真似しているからだ。

かれらには、生まれながらにして、こういうチカラがある。自分で育つチカラだ。
人としてのあるべき姿については、もともと、あかちゃんが、人としてのあるべき姿だから、かれらは、人としてのあるべき姿を目指したりしない。
ここが、大きなポイントである。
「えんちょうせんせいおはようございます」
私は、保育園の園長だった時に、３才児に、いきなりこう言われたことがある。オンナの子だった。私は、すごく驚いた。私のことを、スタッフさえも、園長などとは言わなかった。私には名前がある。苗字にさんだ。
お母さんは、何度も何度も園長先生と言う。何度も何度も、さんにしてくださいと、私は言う。
子ども達に、えんちょうせんせいなどと言われたことは１度もなかった。
私は、お迎えに来たお母さんに、言った。
「こういうことは教えないでください」
お母さんは、よく意味がわからないようだった。
２０１３年の保育園でも、こんな保育園はないのだと思う。保育園には保育園のコンセプトがあって、体面を保たないといけないのだ。そのためには、保育園のヒエラルキーが大事だ。スタッフの保育士も、お互いのことを、先生と言う。
２０１３年でも、このことは、通常のことなのだ。
しかし、ずっと前なのだが、私が園長の時だけになったかもしれないが、私は、子ども達とスタッフと私とお母さんは、全員、フラットの位置にいたかった。１人の人として、子ども達を尊重したかった。
こんなメンドーなことを言うと、聞きたくなくなるから話さない。
「私の方針だからお願いします」
「えんちょうせんせいは困ります」
これしか言わない。
お母さんがワルイわけではないから、私が叱るようなことではない。
ただ、よろいは根深いと実感するだけだ。
このようなことは、日常茶飯事になってくる。３才になってことばができると、もう毎日が、えんちょうせんせいおはようになる。

「あんた前のおばあさんにおはよう言った？」
よくわからないまま、どんどんよろいが入ってくる。ほとんどは、お母さんのよろいなのだ。
「３才なんだけどあいさつもできないんだよね」
お母さんにとっては、すごく重大なことなのだ。
子どもにとっては、無意味なことである。
こうして、毎日毎日、子ども達の身体は、よろいで覆われていく。
５才の時の幼稚園の運動会で、よ～いドンの前に、一歩足を踏み出す子どもも現われる。
「あんたいつもビリだからさ～お母さん恥ずかしいわよ」
もう、生まれた時には、人としてのあるべき姿が１００だったのに、それが60になるのに、たいした苦労はいらない。大人と生活しているだけで、こうなる。
「あんたの偏差値じゃ難しいけど」
こう言われる頃には、もう、こころの愛は20になってよろいが80になる。
人としてあるべき姿がフツウになる。それでも、フツウだからまだいいのだが。
ずっとかれらを観てきていて、つくづく思う。すごく難しい。
人としてのあるべき姿が１００だったのに、ブッダよりすごかったのに、
アッと言う間に、人としてフツウになってしまう。残念だが、現実である。

○自分で育てられなくなる
私は、保育園の園長しかやったことがないので、小学校に入学して、かれらはどうなるのかを知らない。
保育園や幼稚園に入るまでは、お父さんとお母さんのよろいだけで済んでいたのだが、保育園や幼稚園でも、園のよろいがあったり、先生のよろいがあって、どんどんよろいは厚くなっていく。
小学校では、いきなり、先生のよろいだの、学校のよろいだの、教育界のよろいが出てくる。時には、国家のよろいまでも出てくる。
もう、かれらが、自分で育つと言い張っても難しい。あまりにも、よろいを

着せる人が多い。
かれらのすべてが、こうなるわけではない。小学校でも、立派な先生がいらっしゃる。立派な先生と言っているのは、子どもと自分を、同じ立ち位置で接する先生のことを言っている。多分、自分のことを、先生とは、言わせないかもしれない。
先生という言葉の中に、暗黙に、支配者と被支配者の状況をつくる意図がある。
大昔から、先生という言葉は使われている。
会社などでも、Ａ社長とかＢ部長と言うように、習慣づけられている。Ｃ先生と同じである。
すごく残念だが、支配者の指示はゼッタイであるかのように、印象づけられる。
会社や自治体の組織でも、同じことである。
上司をさんで呼んだりしない。まるで、支配者と被支配者の時代とあまり変わらない。２０１３年である。日本に支配者などいないのに、すごく不思議である。
学校では、これが、そのまま習慣づけられる。教師とは何なのか、子ども達にはよくわからない。
私の教師の概念は、子ども達のお手本である。それしかない。お手本であるから、教える人ではない。育てる人でもない。単にお手本である。
多分、日本に多くの教師がいらっしゃるが、自分のことを、単なるお手本だと思っておられる教師は少ない。
担任になったら何をしなければならないか決まっているのだが、その仕事内容も、単に、子ども達のお手本をすればよいなどとは、どこにも書いていないし、単なるお手本だけをやっていたら、給料ドロボーなどと言われる。
私の教師の概念と、世の中の教師の概念は、すごく異なっている。
私の教師の概念の方がおかしいと、誰でもが思う。
でも、これを変えない限り、こどもによろいを着せてしまう大人の邪悪さを払拭できない。
子ども達は、あかちゃんの時から、支配者という感覚がない。もちろん、自分のことを、被支配者とは思わない。

あたりまえである。あかちゃんは、人のあるべき姿の究極の姿である。人の究極では、わたしは、あなたが幸せだったらわたしが幸せだと言ってしまうようなことだ。
あかちゃんが、人のあるべき姿の究極であるからには、どんなあかちゃんも、誰に対しても、あなたの幸せを願っているという態度で生きていることになる。
あかちゃんは、時々、例外的に、自分を産んでくれたお母さんに裏切られて虐待されたり、時には、コインロッカーに入れられてしまうことがある。
しかし、逆はない。
あかちゃんが、お母さんを裏切ることはない。あかちゃんは、１００％、お母さんが幸せだったら自分が幸せなのだ。
お母さんだけではない、だれに対しても、そうする。
ただ、本能的に、味方か敵を見極めるチカラが備わっているだけだ。遺伝子的味方のことだ。自分を襲って食べてしまう敵か味方を見極められる。
これは、よろいではない。別ものである。
つまり、人として究極の姿では、人の立ち位置に、段差などないことである。あなたが幸せだったらわたしが幸せだという態度に、上から目線などあったら、演技だと、すぐにわかってしまう。
あたりまえのことだ。
ほとんどの子どもは、１才になるまでに、お父さんとお母さんから、支配被支配の習慣を植え付けられる。お母さんの言うことはゼッタイだからになってしまう。
それでも、抵抗しているのが、実態である。
英語圏の家庭では、お父さんやお母さんも名前を呼び捨てる。すごく好ましい。どこからきたことなのか、私にはわからない。
日本では、あり得ないことだ。いいとかワルイではない。家の形式を重んじてしまう日本では、父親の名前を呼び捨てることなど、あり得ない。家の形式などは、よろいだから意味はないのだが、難しい。変えられない。
保育園でも幼稚園でも、自分勝手を抑え込まないと、全体がまとまらない。
先生の名前を呼び捨てていたらまとまらないと思い込んでいる。
かれらは、家庭で、お母さんやお父さんに抵抗してきたように、保育園や幼

稚園や学校でも、先生に抵抗する。無意識に抵抗する。
残念なことに、人間社会では、集団ができると、必ず、その集団のリーダーと掟ができてしまうので、支配被支配の因習が、すぐに現われる。
学校などでも、いじめなどはなくならない。たった３人のクラス仲間の集団であっても、支配被支配ができてしまう。
支配被支配の概念がある限り、いじめなどはなくならない。
いいとかワルイではなくて、そうなっている。
支配被支配の因習を消さないと難しい。しかし、そんなことはムリである。
小学校の先生が、自分のことを先生と呼ばれなくなることなんか、考えられない。
それは、自分の存在を表現しているからだ。
私は、保育園の園長の３年間、やった。自分を園長などと言わせなかった。指示としてやらないとムリだ。すごい抵抗があった。
しかし、やらないといけないと、今でも思う。
子ども達と、すごいズレているのだ。
人間としてあるべき姿は、こころのよろいが50で愛が50くらいの人のことを言う。
ブッダは、愛が80だったし、あかちゃんは、愛が１００だ。フツウの大人は、愛が20しかない。80はよろいだから、自分を先生と呼ばなかったりしたら、自分を先生と呼ばなかった人を、いじめたくなってしまう。
これがフツウの大人のやることだ。
ちょっと話しがすごく飛んでも申訳ない。少し前に亡くなったサンフランシスコのパソコンなどの情報機器を開発する天才の話しである。多分、多くの人は、サンフランシスコの田舎風の天才に、楽しいことをたくさんもらった。１人で何兆円も稼いだ。彼は、自分を、名前で呼んだだろう、サンフランシスコの田舎風の天才に、支配被支配が似合わない。
日本の経済が滅びていると私は言っているのだが、滅びているから諦めるのではなくて、滅びを助長してるものを壊さないと、グッドの芽が出ないと言っている。
途中で話しが飛んでしまって申訳ないのだが、経済的に豊かになるにしても、最後は、人としてのあるべき姿になるから、サンフランシスコの田舎風

の天才的な、フラットの姿勢がよい。自分を名前で呼べる人がよい。
私は、３年間に限られるだろうが、そうした。
しかし、２０１３年の日本全体を見ると、すごく難しいと思う。
保育園や幼稚園や小学校に入学すると、先生や組織のよろいを着せられてしまう。
日本の支配者などいないのに、教え育まなければならないというパラダイムから抜けられない。
小学校では、もう難しい。
中学校に入ると、ますます難しい。
私は、中学校の教師をしたことがないので、想像で話すことになってしまう。
私は、教師は、子ども達のお手本をすることが役割だと思っているので、数学を教えるのではなくて、数学のおもしろさを先に得た先輩として、お手本を示せばいいと思っている。もし担任がすべてをやらなければならかったらシンドイ。だれか、数学のおもしろいを、先に会得した人を連れて来ないといけない。
私は、こう考えているのだが、現実とは異なることは承知している。
ただ、私は、子ども達がわかる。かれらの無意識の行動さえも、自分なりに承知しているつもりである。
かれらは、数学のおもしろさを示してくれる人に出会うと、数学が楽しくなるだけの話しだ。
英語だって同じである。ナイアガラの観光案内を英語でやってくれる先輩がいたらおもしろい。
現実は、かれらの希望とはかけ離れているので、教え育まれることは、フツウは、暗くなってしまう。
しかも、中学校に入る頃から、自分の中の生きるコンセプトが、遺伝子のコンセプトから、優秀な頭脳のコンセプトに変化していくので、更に、難しくなる。
小学生が、自らの存在を消すことはない。あったとしたら、それは、すごくマレなことだ。まだ、遺伝子のコンセプトが優先しているからである。豹と同じである。豹が、自らの存在を、自ら消したらおかしい。人は、小学生ま

では、そんなことはしない。生き物として生き残ることが優先している。
しかし、人は、中学生になる頃、変化する。主体が変わる。遺伝子のようである生き残るよりも、優秀な頭脳の、わからないことがあったら解き明かしたいコンセプトが優先する。
人は、中学校の時に主体が変わってから、亡くなってしまうまで、豹のように元には戻らない。
生き残ることの素晴らしさを失ってしまうと言ってもよい。
最近も、いじめによって、生き残ることを放棄した中学生が目立っている。
優秀な頭脳が優先してしまうと、こころが優秀な頭脳にあるので、こころの、愛とよろいのシエアー状態が大事なる。
こころの中のよろいが、あまりに大きくなってしまったら、自分の存在を消すしか、自分のよろいを壊すしか、解が見つからなくなってしまう。
以降、ずっと、人は、亡くなるまで、こうである。こうであるではわからない。
愛が50もあれば、あり得ないことだ。壊しているのは、自分の外側を覆っているよろいに過ぎない。たとえ、どんなに辛いことがあったとしても、生きることに較べたら、たいしたことではない。その辛さは、よろいが感じているに過ぎない。
心の中の愛が大きければ、当然のように、こう感じるのだが、心の中のよろいが大きいと、嫉妬や恨みや悔しさや恥ずかしさが蔓延して、自分のよろいが傷つく。
残念なことに、もともとかれらには、偏差値をいくらにしないといけないなどという概念がない。愛が１００だった。愛には、競争がない。偏差値などは、教え育むシステムのことである。かれらには、無縁なのだが、小学生でも中学生でも、社会のシステムを無視できない。親が無視させない。
もともとないのに、自分で心の中に植え付けないといけなくなる。
オリンピックで金メダルを取るためには、心の中のよろいを大きくしないとムリである。
おもしろいから小学校からスキーのジャンプをやっていて、いま中学生なのに、世界チャンピオンかもしれない女性がいる。金メダルなどは結果に過ぎないから、決して、金メダルを目指しますと言わないことが望ましい。おも

しろいからジャンプを続けて欲しい。
「次のオリンピックでは金メダルが目標ですか？」
こんな感性のないインタビューなどに答えなくてよい。答えると、こころがよろいに傾く。
心の中の愛が小さくなるか大きくなるかは、紙一重である。
おもしろいを追えば愛になって、メダルは結果になる。
メダルを追ってしまうと、辛くなって、メダルを得たとしても、その後が辛くなる。
愛とよろいの差である。
中学生では、もう、ガンガンによろいを着せられてしまうから、難しい。
ホントは、自分で育っているのに、あたかも育てられているかのようになってしまう。

○学習して自分で育っている
子どもは自分で育つのだが、もちろん、自分で育っていることなど知らない。ホントは、かれらは、自己学習のチカラがあるので、学習のための状況を整えるだけで足りてしまう。
学習とは、コンセプトとお手本と学習のための道具でなされる。
子どもは、自己学習のチカラを、生まれながらに持っているので、お手本がいれば、自動的に学習する。学習のコンセプトは、生き残ることだ。しばらくは、この遺伝子のコンセプトが、かれらの、すべてのコンセプトになる。
かれらは、学習のためのモノを自分で用意できない。
生まれて６カ月頃に、ハイハイをはじめる。もし、ハイハイするお手本がいなければ、ずっとハイハイしない。ハイハイは、心臓の位置をいきなり高くしないように工夫しているものだから、必ず、経過した方が好ましい。ハイハイでは、血液は、地球に沿って横に流れるが、立ち上がれば、血液は、地球に垂直に流れる。重力のことである。心臓は、血液が縦に流れると、大きなパワーを出さないといけなくなる。
ハイハイは、いきなり大きなパワーを心臓に与えない工夫なのである。
しかし、お兄ちゃんか姉がいればお手本になるが、１人っ子であれば、お手

本がいない。お母さんやお父さんは、あかちゃんのお手本をすることが、自分の役割だとは思っていないので、ハイハイを子どもに見せることはない。したがって、ハイハイしないまま立ち上がってしまう子どもが、最近は、増えている。良くないことはわかってはいるのだが、どのようにしてお母さんに知らせればよいのかわからない。
１才になると、お母さんが歩いているのを見て、真似をしたくなる。あたりまえだが、向こうの壁まで早く着いてしまう。
真剣に見て観察する。
もともとかれらには、自己学習のチカラがある。
ハイハイは、お手本に困るのだが、歩くことは、お手本に困ることはない。
コンセプトは、生き残ることだ。学習のためのモノは、シューズであったりする。
お母さんは、歩行を練習する。骨がまだできていないので、体重がかかってしまう歩行の練習などしない方が好ましい。子どもの時からＯ脚になってしまう。
大人は、多分、誰１人として、こんなかれらの自己学習能力を知らない。
彼らは、生き残らないといけないから、必死で学習する。もし狼に育てられたら、立ち上がらない。ずっとハイハイだ。それは仕方がない。お手本がいないから。
かれらの、このような自分で学習するチカラを知ると、お母さんのあかちゃんとの対応も変わってくるのだろうとは思う。
『あかちゃんからの手紙』を読んでいただきたい。
かれらが、生き残るために自分で育つのだが、身体が成長することでは、４才の頃の、足のアーチの成長が、最も遅くやってくる。それと、７才頃の歯が永久歯に生え替わることだ。
まだ小学校の低学年である。アーチの成長などは、幼稚園だ。
私は、山に登ることが好きだ。時々、年長さんくらいで富士山を平気で登ってしまうかれらと出会うコトがある。
アーチができたんだと感心する。
アーチは、足底に十文字のように、骨で形成されるバネのような構造である。これがなかったら、富士山など登れない。アーチが完成してしまうと、

体重が少ないので、平気で富士山に登ってしまう。
このような、身体が成長することは、遺伝子がやっていることなので、かれらが学習して得ていることではない。ただ、アーチは、使わなかったら強くならないので、かれらは、アーチができると、無意識に、運動をたくさんする。
小学校時代は、ほぼ、このように、身体の成長に関して、自分で学習することが多い。
一方で、次第に、算数のテストがあったりする。
かれらの主体は、次第に、優秀な頭脳に移っていく。
生まれてからずっと、「階段は登るな」「家の中では走り回るな」「遊びながらごはんを食べるな」「朝はキチンと起きろ」「朝ごはんは食べろ」「隣のおばさんにあいさつしろ」「知らないおじさんについて行くな」「学校からは真っ直ぐ帰れ」などなど、様々なことを指示されてきている。
みんな、人としてあるべき姿ではなくて、わたしの子どもとしてふさわしい行動のことだ。あるいは、我が家の子どもとしてふさわしい行動である。あるいは、うちの保育園としてふさわしい子どもである。
はっきり言って、かれらは、よくわからない。そもそも、そのようなニーズなど、かれらにはない。
もともと、人としてあるべき姿にもっとも近い人だった。あかちゃんの時はそうだった。よろいがゼロだった。
日に日によろいを着せられていって、小学校を卒業する時には、立派なよろいを着てしまう。
一般的に、大人らしくなったと言う。大人のあいさつもできるし、相手への気遣いもできるようになる。よろいを着ていくことを、大人らしくなったと表現する。
かれらには、そんなニーズなどないのに、よろいを着せられていく。かれらは、決して、自分でよろいを着たりしない。小学校低学年までは、自分でよろいを着ない。
「中学の試験受けるから」
小学生なのに、こんな、自分のニーズにないことを、はじめてやらされるところから、次第に、かれら自身が、自分でよろいを着ていくことになる。

中学に入ると、よろいの世界が見えてくる。偏差値なるものも見えるし、学歴なるものも見える。女性だったら、キレイであることもよろいになる。英語を話せることもよろいになるし、サッカーが上手であることもよろいになる。様々なことが、よろいになる。
お母さんの期待にそって行動することもよろいになる。
よろいは、自分を覆っているものだから、自分を守るものでもある。
お母さんの期待にそって動いていることがよろいになったりすると、いじめにあっても、お母さんに話せなくなる。
いじめる側も、お母さんの期待にそっていることがよろいになっている子ども達が多いから、お母さんに知られることで、いきなりよろいが壊れる。
人の主体が遺伝子から優秀な頭脳に変わる中学生になって以降、人は、ずっと、自分のよろいに悩むことになる。
自分のよろいに悩むのではなくて、自分の悩みが、自分のよろいが傷つくことに過ぎないことに気がつかない。
よろいがなかったら、悩まないことだってたくさんある。
人の悩みのほとんどは、こうだ。身体の健康以外の悩みは、みんなこうだ。よろいに悩んでいる。
かれは、自分で学習して自分で育っていたのに、次第におかしくなる。
私は、小説の中でしかできないのだが、かれらの、自分で学習して自分で育つチカラを、そのまま発揮させたらどうなるのか、すごく興味がある。
多分、小学生なのに大学生になってしまう。おもしろいからとことん追うからだ。
多分こうなる。
教え育むことの枠がメンドーなことになっていると私は思う。

自分の子どもと言ってしまう

○自分の子どもと言ってしまう

私は、小説の中にしか、かれらの自分で育つチカラを表現できない。
現実は、かれらの最良の味方であるお母さんにも、ある種の固定観念がある。お母さんと子どもの関係がおかしい。
昔から、大人と子どもは、こうだからという固定観念の中にある。
よくよく観ると、お母さんは、妊娠した時から、子育てなどしていない。自分で、あかちゃんの状態が掴めない。目には見えないし、どのくらい大きくなっているのかすらもわからない。
助産師さんや産婦人科の医師に、エコーで映像を見せてもらわないとわからない。昔は、エコーなどなかった。
お母さんは、自分の子どものことが、全くわからない。そもそも、自分の子どもということばがおかしい。
自分の身体に宿った１人の人である。それがあかちゃんだ。
ただ、生き物のコンセプトは、世代を次に繋げることだから、何も考えることなく、自分の身体に、自分ではない人を宿す。
豹だって同じである。生き物は、みんな同じである。遺伝子のコンセプトである。遺伝子のコンセプトは、世代を繋げることしかない。
豹は、世代を繋げるコンセプトに従って、自分以外の豹を、自分の身体の中で育てる。育てるのではなくて、単に、自分以外の豹に、自分の身体を貸しているだけだ。
豹は、豹のあかちゃんを、自分の子どもとは思わない。ライオンだって同じである。
ここが、そもそも、人間のおかしなところである。
あかちゃんをよく観ていると、なんであかちゃんが自分でやっているのに、あたかも、お母さんに育てられているかのように言われてしまう。べつに心外とは思わないのだが、事実は、異なる。
豹だって人間だって同じである。

単に、お母さんは、自分以外の人に、自分の身体を貸しているだけだ。タダである。
それが、生き物の遺伝子のコンセプトだから、いいとかワルイといったことではない。そうなっているだけだ。
しかし、人間のお母さんは、単に、自分の身体を貸しているに過ぎないのに、あかちゃんが発育することに関しても、自分の責任だと思い込んでしまう。
豹などと異なることは、ここである。
自分ではない人が発育するのだから、自分の思いどおりにはいかない。出産するにしても、事故があるかもしれない。生まれてからも自動車にぶつかるかもしれない。
豹は、遺伝子の要請に従って、次のあかちゃんに向かうが、人は、引きずってしまう。
理由がある。豹にはこころがないが人間にはこころがある。
これが決定的なことだ。
豹は、遺伝子のコンセプトだけで生きている。生き残ることが何より大事だ。人間のように、自分で生き残ることを放棄したりしない。ゼッタイに、１匹の豹もいない。１匹の昆虫さえもいない。
こころは、優秀な頭脳にある。
優秀な頭脳を得たことが地球のチャンピオンになった理由なのだが、残念なこともある。このまま優秀を貫いたら、今に、地球にすら良くないことをするかもしれない。そんな危険性を人間の優秀な頭脳は持っている。昆虫などは、「ヤツらは、今に地球を爆破する」と言っているだろう。人間の優秀な頭脳は、すごく危険である。大量殺人の道具をつくったら表彰されるのだ。昆虫が驚くのもムリはない。
こんな優秀な頭脳のブレーキとして与えられたのが、見えざる悪魔と愛である。優秀な頭脳の中に混在する。
見えざる悪魔は、人間社会では、よろいに変身していることが多い。
人間の社会がはじまってずっとだが、人間の優秀な頭脳は、どんどん進化している。しかし、まだ地球が生き残っているのは、見えざる悪魔が、優秀な頭脳を滅ぼしているからだ。

４大文明の発祥地だって、栄えただろうに、今は、遺跡すら探すことに苦労する。人間社会はみんな滅びる。見えざる悪魔が滅ぼした。
もし見えざる悪魔が人間社会を滅ぼさなかったら、もう、人間という種は、地球にいなかったかもしれない。恐竜は１億６千万年も地球のチャンピオンだったが、人間は、まだ短い。恐竜が地球で滅んだ理由とは、全く異なる理由で、人間は、地球で滅びる可能性がある。
見えざる悪魔は、優秀な頭脳と戦っている。ほんの50年くらい前も、地球の爆破競争をしているのではないか思えるくらいに、原発の元になっている爆弾をつくり続けた。
優秀な頭脳を止めることは難しい。
見えざる悪魔は、社会構造を滅ぼした。１が３になり、３が５になるような競争の論理は、人間のチャンピオンのエクスタシーによるものだ。いいとかワルイではなくて、人間は、そうなっている。だから、チャンピオンのエクスタシーなどない昆虫に、「ヤツらはいつか地球を爆破する」と言われる。
見えざる悪魔は、優秀な頭脳を滅ぼすことで、優秀な頭脳のブレーキ役を果たしてきた。
もう１つの優秀な頭脳のブレーキの愛は、なかなか陽の目を見なかった。
愛は人間にしかないものだが、人間社会では、物語のようになっていた。
２０１３年までの地球の生き物社会は、あまりにも、食物連鎖競争が過ぎた。
食物連鎖のチャンピオン競争には、愛など余計なことだ。狩りが大事だ。戦いが大事だ。奪取が大事だ。
愛など、どこにも入り込む余裕などなかった。
人間が地球の食物連鎖の頂点に立って、他の生き物は、あたかも、人間の食糧のために地球に存在するかのようになってしまった。
それだけ、地球のチャンピオンの意味は大きい。恐竜の時代だって、「地球は恐竜しかいなくなる」と昆虫たちに言われただろう。
そう言われはじめたら、恐竜はゼロになった。人間も、２０１３年には、危うい時間に入った。
「ヤツらは今に地球を爆破する」と昆虫に言われている。
見えざる悪魔は、確かに、優秀な頭脳を壊すことで、生き物を守ってきてい

るのだが、２０１３年の優秀な頭脳の進み方は、異常である。
いくら見えざる悪魔がガンバっても難しい。
やっと愛の出番なのだ。
こころは愛の器だから、こころの出番と言ってもよい。しかし、こころは、愛と見えざる悪魔が変身しているよろいとによってシエアーされている。
下手をすると、愛の出番を、よろいによってジャマされる可能性がある。
おかしなことに、愛も見えざる悪魔も、優秀な頭脳のブレーキなのだが、人間のこころの中では、戦っている。
もちろん、愛が勝ち残ることが望ましい。
地球の爆破をくいとめるのは、愛しかない。
よろいは、優秀な頭脳を滅ぼすのだが、下手をすると、単に、あいつよりオレが優秀だといった、どうでもいいようなことにも、勝ち残ろうとする怖さがある。
ほんの70年前にも、民族１つを抹殺しようとしたことがある。よろいに過ぎないのに。
愛の出番なのだ。愛でしか守れないかもしれない。
豹にはこころがないから、命を繋げることに集中できるが、人間は、そうはいかない。こころがあって愛がある。
人間が、自分の子どもと言ってしまう不思議さは、人間にしかない愛によるものだ。

○愛があるから
愛の話しをはじめるとながくなる。
豹は、こころも愛もないから、わたしの子どもとは言わない。豹のお母さんが、自分を盾にしてまであかちゃんを守るのは、後に繋げて生き残るという遺伝子のコンセプトによるものである。豹だけではない。どんな生き物だって、母親はそうする。人間だって同じなのだが、時々例外もある。コインロッカーに入れたりする。これは、母親のよろいの厚さによるものだから、人間が変わったなどと、深く考えない方がよい。豹だったらやらないことを、人間にはこころがあるからやってしまうだけだ。しかも、極めてマレで

ある。
愛は、人が動く押しボタンである。こころは、愛の器である。
人間のお母さんは、自分の行動が、豹と同じような遺伝子の要請であかちゃんを守っているのか、遺伝子の要請ではなくて、あかちゃんを守りたいから守っているのかの、区別がつけられない。
わたしのあかちゃんと言っているのだが、それは、昔からの因習によるところも大きい。
「お母さんの務めだから」
暗黙のうちに、お母さんは、妊娠した時から、こういう因習にとらわれる。
豹にはない。あかちゃんがインフルエンザにでもかかったら、必死になって自分を責める。あかちゃんのおばあちゃんには、とんでもないことを言われることもある。
愛は、少し異なっている。
昔、お百度参りのようなことは、頻繁にあった。今は、病気を治せないのは、医者の腕がワルイといった方向に向かっているように思える。
お百度参りは、豹はしない。
人で、しかもこころの愛のシエアーが少し高い人でないとしない。
愛とは、こういうものだ。人が動く押しボタンである。
お百度参りをするくらいだから、自分が産んだあかちゃんは、自分の子どもと言ってしまう。
私は、保育園の園長を３年間やっていた、もちろん、保育園の園長なのに、私の子どもと言ったらおかしい。
私は、子ども達と私は、同じ立ち位置にいようと思った。生活ではない。３年間の１年目は、素人園長だったし固定観念があった。
「うちの保育園では」
「園では教育もしますがカリキュラムは云々」
「うちの園のコンセプトは愛を生める子ども達です」
愛を生める子ども達など、どういう子どもなのか聞かれなかったから良かったものの、平気でパンフレットに書いていた。
今は、愛が生める子ども達について話すことができる。今ではではなくて、２年目には話すことができるようになっていた。

「園長なのに子ども達にキチンと教えてください」
スタッフに、こう言われて困った。
私は園長だったが、誰も、園長と言ったことがなかった。さんだった。保育士もさんである。子ども達はみんな愛称だった。
これだけは、１年目からこうした。１年目というか、保育園を立ち上げたからだ。
同じ立ち位置というのは、こういうことを言っている。
これだけは、１年目からやってよかった。途中からでは変えられない。
保育のスタッフも、お母さんとの関係では、先生と言われておかないとメンドーが多い。
お母さんと保育のスタッフは、争ってしまう。
保育のスタッフは、なかなか、自らを、お母さんたちの支援をする感覚にならない。
私は、オープンする前に、何ヶ所かの保育園を見学をさせていただいていて、保育園にも権力構造があることを知っていた。
子どもと一緒に暮らすことに、権力構造など必要ないと思っていた。
１年目に、園長なのに何も教えないと言われたのだが、何を教えたらいいのかわからない。
桃太郎はこういう話しだと教えるのだろうか。歩き方を教えるのだろうか、よくわからないまま１年が過ぎた。
私は、教えるということに疑問を持った。
私は、よろいを発見したのだが、子ども達に私の中の醜さを発見してもらった。子ども達は、私を見抜ける。あたりまえだが、弱いがゆえに、味方かどうかを見抜ける。子ども達が共通に持っている能力である。私は、兼務していた。研究者の仕事である。
研究室で言い争っては、保育園に入ったことも多かった。子ども達は、私に近寄らない。
これは、すごい能力なのだ。身体にくっついている。子ども達は、生まれる前に、自分を食べるかもしれない野獣の唸り声を教わっている。生まれる前に、匂うチカラを発揮させていて、お母さんのおっぱいの匂いを、生まれた瞬間から完璧に見分けられる。１００％である。隣のお母さんのおっぱいと

は違う。生まれた時には、お母さんの声を聞き分けられる。生まれた時に、酸っぱいものや苦いものを味わうチカラがあって、吐き出せる。
みんな、生まれた時が一番危険だから、こうなっている。みんな、身体がリラックスしない。固くなっている。生まれる時に、産道を通るから、固く丸くなったせいもあるが、しばらく危ないから、緊張しているせいでもある。
これくらいだから、私が味方かどうかを見分けるくらいは　　わけなくできる。しかも、今は味方かどうかだ。私が味方でない時もある。
子ども達は、黒が嫌いだった。子ども達の世界には、丸いカタチ以外はない。直線がない。黒い色はない。子ども達は、お母さんの乳首が黒いから見分けられる。お母さんの目が黒いから見分けられる。髪もだ。
しかし、全身黒いと、もう味方ではなくなる。
私は、意を決して、ブランド物の白の上下のジャージーのスポーツウエアーに着替えた。その上から、縦じまのエプロンをしていた。
子ども達には好評だった。私は、完全に子ども達の味方になった。
大人のビジネスの世界では、子ども達がいないせいもあるが、ほぼよろいで固められる。スーツにネクタイだ。しかも、ほぼ黒っぽい。
私は、保育園時代の３年間、ほぼ、白のジャージのスポーツウエアーとエプロンで過した。
会社に勤めていたが、ある時、エライ人に、エプロンを引きずられたことがある。
「会社の社員らしくない」
私は、反論もしないし、翌日からスーツにすることもなかった。私にとって１番大事なことは、子ども達と同じ土俵で過すことだった。
大人の会社のよろいなど、どうでもよかった。
私は、次第に、よろいの実態を、身をもってつかんできた。実は、よろいについては、見えざる悪魔なので、多分、小学校４年くらいの時に、すでに、感じてはいた。気がついてはいた。
よろいがゼロである子ども達と暮らして、それが明確になった。同じように、愛も明確になった。私の愛だ。
私は、子ども達に、何かを教えるどころではない、私は、子ども達に、何から何まで教わっている。

確かに子ども達は、自分で料理をつくって食べることなどできない。算数だってできない。
だから、教えるというのは、違うのではないかと思うようになった。
私以上に、子ども達は、すごいことができる。
まず、よろいがゼロということがすごい。こころは、よろいと愛がシエアーしているのだが、愛が80でよりが20の人は、ブッダの他に、世界でも２人しかいなかった。フツウの大人は、よろいが80に愛が20しかない。だから、頻繁に事件は起きる。戦争だって起きる。
愛が80もあったら、誰も争わない。
子ども達のこころの愛は１００なのだ。人間としては、これ以上はない。
ノーベル賞をいただくより、こころの愛が80ある人間で死ぬことの方が素晴らしい。
子ども達は、それが１００なのだ。
話しがブレている。
お母さんが、どうして自分の産んだ子どもを、自分の子どもと言ってしまうかの話しだ。
自分のスマホは、自分の思うように使えばいいのだが、あかちゃんは、違う。
自分とは違う人が、自分の身体を通り抜けているだけだ。
お母さんの約30％の人が、何らかのカタチで、あかちゃんに手をかけてしまいそうになる。２０１３年の実態である。
哀しいけど、愛があるからこうなる。心の反対によろいがあるからこうなる。残念だが、こころの愛は、お母さんでも、多分30くらいだ。よろいが70ある。
あかちゃんが、お母さんの生きることのジャマだと思う瞬間があっても、それはフツウのことだ。
ましてや、自分の産んだ子どもだから。
自分の子どもなどいない。
１人の、まだ何もできない未発達という特徴を持った、人である。それが子どもである。

○尊重すること
かれらのことを、お母さんは、自分の子どもと言う習慣に疑問を向けた方が好ましい
昔から、わたしのあかちゃんと言う。わたしの子どもと言う。
私が、教え育むと言うことが不思議だと言っていることと同じである。
わたしの子どもと言う。このことが、私には、不思議である。
かれらは、自分で学習して自分で育っている。お母さんに育てられているわけではない。お母さんに世話はしてもらっている。
言葉は思考を呪縛する。
いくら頭で、わたしと子どもは違うとわっかっていても、わたしの子どもと言ってしまったら、子どもは、わたしの分身になってしまう。
教え育むとおなじである。
ずっと変えられない。ことばが変わらないと考えを変えることができない。
教え育むは、支配者が被支配者に、自分の考えを植え付けようとしてはじまったものだ。言葉が、それを表わしている。
２０１３年には、支配者などいないから、だれの考えを植え付けようとしているのかわからない。教え育む現場も苦労する。
２０１３年においても、世界には、いまだに支配者と被支配者の社会がある。このような社会においては、支配者がはっきりしているから、支配者の考えを植え付けることに、違和感はない。
教育とは、そういうものだし、ピッタリだ。
しかし、２０１３年の日本には、教育という言葉は、そぐわない。
同じように、わたしの子どもとお母さんが言うことも、２０１３年の日本ではそぐわない。
自分の子どもと言っている限り、お母さんの範囲から、かれらは出られない。
２０１３年の日本では、こういう子ども達が多い。なんでもお母さんの了解がないと動きにくい人だ。若者だけではない。もう、１９９０年ごろから、ずっと続いている。
かれらが、お母さんのことを、おふくろと言っているのを、あまり聞かなく

なった。オヤジと言うのも、あまり聞かなくなった。
おふくろやオヤジは、自分の親を客観視できていることだから、好ましい。
うちの母と言ってしまうことがフツウだろう。
このように、お母さんやお父さんや、パパやママや、おふくろやオヤジと、いろいろな言葉があると、好ましい。
私は、よろいについて、いくつかの文を書いている。非常に興味深い。研究していると言っても過言ではない。事件は、例外なく、よろいを起点に引き起こされるものだと思っている。人間の醜さは、よろいにしかないと思っている。
２０１３年の日本における重要なよろいの１つは、かれらとお母さんの関係にある。
お母さんに褒められることがよろいになってしまっていることだ。
たとえ泳ぎが下手であっても、お母さんに期待されていることが身に染みてわかることだ。
大学だって、お母さんの指示なしでは決めきれない子どもが多いのだ。
かれらとお母さんの関係をよろいにしたのは、お母さんのよろいである。
「あんた大学はここに行ってよ？」
「お母さん恥ずかしいから」
「お母さんの大学よりいいとこに行ってよ？」
とにかく、看板が大事なのだ。よろいが大事だ。こんなことを毎日聞かされていたら、かれらだってよろいが厚くなってしまう。
いつかもっとすごい人が現われたり、思う大学に入学できなかったりしたら、言われる。
「こんくらいだとは思わなかった」
かれらのよろいは、いきなり壊れてしまう。
もともとよろいしかないのだから、よろいが壊れたら何もない。今日生き残ることだって難しくなる。
「うちのおふくろウルサくてどうにもならない」
「話ししないようにしてる」
「入学式にまでついてくる」
「北海道の大学に行こうと思う」

こんなことがグッドだ。北海道のかれらは、東京に行けばよい。
わたしの子どもと言って不思議でない２０１３年の日本の親子関係は、すごくおかしい。
わたしのこどもである限りは、１人の、自分以外の人として尊重できない。
人には愛があるから、母親とかれらの２人の集団のよろいを形成してしまうのだろうか。
そうではない。
愛を表現していることばの１つは、あなたが幸せだったらわたしが幸せだというものだ。
もちろん、家族間でも、他者に対しても、他の生き物に対しても、モノに対してもだ。
地球の生き物は、哀しいことに、他の命をいただかないと存在できないようになっている。
これが、愛をなかなか、受け入れない理由である。戦って狩って、相手を食糧にしないといけない。
それでも、戦って狩った他の命に感謝して、生き続けないといけない。
だから、ホントは、あなたが幸せだったらわたしが幸せだということばは、残酷の裏がえしである。
それはそうなのだが、地球に生きる限り仕方がない。
それでも、最大限、あなたが幸せだったらわたしが幸せだを実行することが、愛が大きい人の行動である。
人間として好ましい。人間以外は、こんなことは考えない。隙あらば襲って食することが、生き物のフツウだから。
だから、あなたが幸せだったらわたしが幸せだを完全に実行できる人は、こころの愛が80くらあった、ブッダくらいしかできない。過去に、地球上には、ブッダの他に、２人しかいなかった。
私などは、こころの愛が50くらいになってから死にたい。
こころの愛が50であったも、あなたが幸せだったらわたしが幸せだという態度をするだろう。私は、まだ、私のこころの中の愛が、50にも達していないのでわからない。
愛を表現しているもう１つのことばは、あなたのゼッタイ的な味方だと言え

ることだ。
もともと、母親の子どもに対する行動は、口に出さないものの、あなたのゼッタイ的な味方だという行動をする。豹だってするから、これは、遺伝子の要請によるものだ。子どもに危機が迫れば、自分の命と引き替えても守る。自分より、子どもの方が、より後にいるからだ。後に繋げたいという遺伝子に要請にそっているだけだ。
愛ではない。
「あんたビリだったけど駆けっこの姿勢が１番良かった」
これは、愛だ。
あなたのゼッタイ的な味方なのだ。母親は、子どもに対して、必ず、こうなる。お母さんのよろいがフツウだったら、こうなる。お母さんのよろいが85くらいになったら、ちょっと苦しくなる。
ビリだったら話しがない。
「どうせダメだと思ってた」
こう言われてしまうと、立つ瀬がなくなる。
フツウのお母さんは、子どもに対して、ゼッタイ的な味方になる。
私は、保育園の園長の時に、偽りの愛だと感じたことが何度もある。偽りの愛は、よろいのことだ。わたしの子どもに対してゼッタイ的な味方なのだが、それが、よろいになってしまうことだ。愛から離れてしまう。
「うちの子だけ叱られるのはどうしてですか？」
次第に、こうなるから、すぐにわかる。
愛は、わたしは、あなたのゼッタイ的な味方だからという態度をするのだが、それは、家族間でも、他者に対しても、他の生き物に対しても、モノに対しても、ゼッタイ的な味方だと言ってしまって、行動することだ。
よろいと愛は、時々見分けにくい。お母さんだって、よくわかる人はいないだろう。
「うちの子だけ叱られるのはどうしてですか？」
こんな状況で中学校まで進んでしまったら、もう、困ったことになる。
もし、いじめがあっても、お母さんには話せない。かえってメンドーになって、更にいじめが陰湿になることを知っている。かれらが知っているのだが、お母さんは、知らない。

かれらは、自分で学習して自分で育っているから、お母さんに、わたしの子どもと言われるのは、おかしい。私が、こう言っているだけで、誰も言わない。
かれらだって、自分で気がついていない。なぜなら、かれら自身が、自分の中の、自分で学習するチカラと、自分で育っている実態を知らない。
尊重されないまま、１人の人として生きることは、辛いことだ。オリンピック候補選手だったら尊重される考えは、まずい。
ブタだって、食糧だが、尊重されないと、反乱して毒になる。

○ゼッタイ的な味方の存在

お母さんの偽りの愛は、時々、メンドーを引き起こす。わたしとわたしの子どもだけの、２人のよろいになってしまうことが多い。
それでも、かれらが発育するためには、かれらのゼッタイ的な味方が欠かせない。
たとえ、かれらがいじめ側に回って、大きな批判を浴びようが、仲間と、コンビニで万引き競争をしても、ゼッタイに守り抜いてしまう、ゼッタイ的な味方が欠かせない。
フツウは、これを、お母さんが引き受ける。
もし、お母さんが、ゼッタイ的な味方になってくれなかったら、かれらは、混乱して、行く先を見失う。時として、明日生きることさえ見失うことだってある。
かれらは、生まれる前から教えられている。あなたを守ってくれるのは、お母さんだと言われて、お母さんの匂いを教え込まれる。だから、しばらく歩けもしないし言葉もないと教えられる。
こんな状況だから、かれらと母親の２人に、よろいができても仕方がないと思ってしまう。ホントはまずいが、そういう状況である。いいとかワルイではない。
お母さんの、わたしのこどもは、両刃の剣である。かれらには、たとえ社会道徳的に良くないことを犯したとしても、かれらをゼッタイ的に守る人が必要である。もし、ゼッタイ的に守ってくれる人がいない時は、最悪の状況に

陥ることが多い。
一般的には、そのゼッタイ的に守る人は、お母さんである。
一方、かれらをゼッタイ的に守るお母さんと彼との 2 人の集団は、例外なく、よろいになるので、愛から離れていく。
ホントは、ゼッタイ的な味方だから愛なのだが、みせかけの愛になってしまう。よろいである。
教え育むにおいて、このゼッタイ的な存在の両刃の剣は、好ましい方向に転ばないことも多い。
彼らの身体が持っている自分で学習して自分で育つチカラを封印して、社会が望んでいるかのように見える試験にまい進する。
やろうとしていることは、すべて、かれらの特徴づけのことなので、おもしろければやればいい。ただそれだけだ。
まい進することが、人のあるべき姿だと、ほとんどの場合誤解してしまうことが、すごく残念である。
「オレが就職できないなんて世の中がおかしい」
まい進してきたのに、結果も好ましいのに、就職でないことを悩んで、自ら生き残ることを絶つ若者がいるようだ。ますます多くなっているそうだ。
単なる特徴だからどうでもいいはずなのに、人のあるべき姿と誤解していると、辛いことになる。
「あんたがなんで就職できないの？」
お母さんと子どもの 2 人の集団であっても、子どものゼッタイ的な味方であっても、お母さんは、自分のよろいがあるから、こう言う。
お母さんの評価が高いことがよろいの 1 つでもあったのだから、このことばは、辛い。
このゼッタイ的な味方の話しは、欠かせないことなのだが、辛さを生んでいくだろう。
あまりにも、お母さんのよろいが厚くなってしまったからだ。
ゼッタイ的な味方が、変身してよろいにならないことを祈らないといけない。難しいことだ。
現在の日本の社会において、事件が起ることは、すべて、よろいが引き起こしていることである。

学校の運動競技部の暴力事件においても、いじめによる事件にしても、夜中の国道のひき逃げ事件においても、選挙の買収事件においても、電車での痴漢事件においても、株のインサイダー事件においても、すべて、よろいが引き起こしていることである。
そして、それは、誰かのよろいである。
誰かがワルイわけではない。
誰かのよろいがワルイ。
ここが、人にゼッタイ的な味方が欠かせない理由である。
死刑の判決を受けたとしても、誰かがワルイわけではなくて、誰かのよろいがワルイ。
これは、ゼッタイ的なことだ。これを信じられなかったら、人間の将来はない。人のあかちゃんは、愛が１００からはじまる。よろいがゼロからはじまる。
どんなことがあっても、人を恨んではいけない。人を見てはいけない。その人のよろいを見ないといけない。
残念なことに、毎日毎日、新しい事件が報道されているのだが、いかに、人のよろいが醜悪であるか、わかる。
よろいを見て人を見なければ、人にゼッタイ的な味方が欠かせないこともわかる。

教え育む

○支配者の時代はこれでいい

教育は、教え育みたい人からの言葉しかない。教え育まれる側からの言葉がない。
教え育まれる側には、とやかく言う権利はなかったのだろう。ホントは、かれらのために教育があるのだが、かれらに発言の機会などない。一方的なのだ。大人からこどもへ、一方的である。支配者から被支配者へ一方的である。
親から子どもへ一方的である。
これはこれでよい。
美濃の殿様などに、一方的だと言ったらその場で切られてしまう。
そのような、一方的でもおかしくない時代の言葉を、そのまま２０１３年に使っていることが、おかしい。
一方的でもおかしくない時代と、２０１３年の日本の時代の違いは何だろう。
一方的でもおかしくない時代では、支配者の価値が１００で、被支配者の価値はゼロだった。教育は、あなたのためにあるわけではないと言ったら切り捨てられて、ゴミ箱である。
２０１３年には、教育は、あなたのためにあるわけではないと言っても、切り捨てられない。切り捨てた方が逮捕される。
しかし、逮捕されるのだが、誰も言わない。言って切られても、自分が逮捕されることはないのだが、誰も言わない。
おかしなことなのだが、言葉が、そうなっている。言葉とは、すごいものだ。
２０１３年の日本では、支配者がいないから、事実上の、教育をしたい支配者に等しい人は、教育界のエライ人になる。すごい多くの人がいる。ヒエラルキーを構成している。がんじがらめのように見える。かって、支配者がいて、自分の考えを植え付けたかった時代の、陰のスタッフの人達である。

２０１３年には、事実上、ものすごい多くの、日本の教育界の陰のスタッフが、陰のスタッフなのに、教え育む、考えと構造と執行を任されている。
私は、これを、教育のよろいと言う。
残念だが、人間の集団社会では、常にこうなる。いいとかワルイと批判しているわけではない。論じているだけだ。
常にこうなるとはどういうことなのかが問題である。
最近、オレがデフレを止めて景気を良くすると言って、選挙で買ってしまった人がいる。反論しているわけではない。経済も、教育と同じだと言いたいだけだ。
教え育むは、支配者の時代の言葉であって考えだ。２０１３年にも、支配者がいないのに、支配者の教え育む体制を維持することには、ムリがある。
景気を良くすることは、支配者の時代の経済論理であるから、２０１３年にも、支配者がいないのに、景気などという支配者の言葉を持ち出して経済運営をすることには、ムリがある。
人は残念だ。
もう数千年も、支配者が存在する社会で暮らしてきた。支配者がいない社会通念がないのだ。学問の論理もない。
オレが景気を良くすると言っても、昔の、供給経済社会の古びた論理を持ち出すしか方法がない。デフレとかインフレとか、そんなものは、２０１３年にはない。
しかし、デフレ脱却という古臭い言葉しか使えないのだ。インフレターゲットを決めるのだが、そもそも、デフレではないのに、インフレになるわけがない。
簡単である。
日本は、何千年も前から、人の社会が滅びるのと、同じスタイルで、滅びているだけだ。
もう、10年も朽ちている。
人は、豊かになると、豊かの源泉である、再生産と消費に無関係のコトに投資をして、財政赤字を続けて、誰もお金を貸してくれなくて、財政破綻して滅びる。
世界で、世界遺産になっている建物や遺跡物は、すべて、そうしてできた。

社会が滅びた証なのだ。
いいとかワルイではない。
人は、例外なく、豊かになったら、こうする。個人でも、豊かになったら、すごい絵画が欲しくなる。例外がない。そして滅びる。
国家も、人が集まって運営しているのだから、例外ではない。すべての国家は、滅びた。昔の中国も、一旦豊かになって滅びた。
滅びたら、新しくなる。
滅びるに等しくなったのに再生した国家などない。１例もない。人間の掟である。
日本は、典型的に豊かになってしまった社会だから、滅んでいてあたりまえである。
人間の歴史で、まだ誰もやったことがないが、滅んでいることをくい止めて、再生したい。
私は、想いだけは、こうである。
教え育むも、似た話だ。
支配者の時代が、日本でもながかったので、支配者の教え育む体制や論理しかない。何をやっても、教え育む側からの手続きを考えるしかない。方法がない。
方法とは、教え育まれる側からの方法のことだ。誰も思いつかない。誰も、教え育まれる側からのシステムを、開発しようとしない。
すごいことなのだが、あたりまえでもある。日本などは、１度も、支配者がいなかった時代がないのだ。
２０１３年において、教え育むという考えとシステムはおかしいではないかと言っても、誰も、何も手持ちを持っていない。ずっと、この支配者からの教え育むというパラダイムに、疑問を持っていないのだ。
おかしなことなのだが、２０１３年には、日本に支配者などいないにもかかわらず、支配者的人がたくさんできてしまう、滑稽なシーンが、フツウである。
みんな、支配者の陰のスタッフだったのだが、陰のスタッフがいなかったら、いいとかワルイではなくて、みんなが学ぶ体制ができない。
ホントは、おかしい。

子ども達は、自分で学習して、自分で育つようになっているのに、支配者の意向を植え付けたがために、教育というシステムをつくったに過ぎない。それはそれで仕方がない。支配者に１００の価値があって、被支配者の価値がゼロだった時代がながく続いたのだから、仕方がない。
しかし、２０１３年は、ゼンゼン違う社会なのだ。
にもかかわらず、言葉が示すように、教え育むにはどうしたらよいか、みんなで、日夜考えている。

○生活者主権なのに
教え育むということばの背景には、立派な人がという言葉が隠されている。
あるいは、尊敬する人である。あるいは、権力者である。
世界中で行われている教育の概念は、権力者の意向に沿うことを、教え育てることを言っている。
中世の時代には、ピッタリフィットする。どこの地方にも君主がいた。ヨーロッパだって、たくさんの王様がいた。中国なんかは、すごく早かった、大昔に、地方に分かれて中国支配を争った。
日本だって、尾張から日本の支配を目指した人がいる。
そういう時代だった。
いいとかワルイではない。君主と民の時代である。
ホントは、いびつな時代である。
もっと昔は、８家族が、自給自足をして暮らしていて、あまりにも狼やワシにあかちゃんを連れ去られるので、８家族がまとまって、柵をつくったのがはじまりである。
家族ではない集団のはじまりである。
８家族の誰かがまとめ役をしなければならないので、背の１番高いオトコが、仕方なくやった。
みんなから公平にお金を集めて、柵をつくる木を、森の近くの集団から買った。
この頃、あかちゃんを教え育む考えなどない。背の１番高いオトコは、自分のニンジンを作ることに興味があった。

何代もして、集団は、次第に大きくなって、背の１番高いオトコは、みんなのまとめ役専門になった。ニンジンなどつくっていられなくなった。
４００家族になった時、森の集団を襲うことを、背の１番高いオトコは提案した。
もともと人には、チャンピオンのエクスタシーがある。８家族だったらエクスタシーは現われないが、４００家族になったら、エクスタシーが現われる。背の１番高いオトコは、自分が命令することを、みんなが従うことに酔った。
ここから、おかしな時代がはじまった。君主と民の時代である。
いびつな時代である。
地球に限りがあることから、このエクスタシーははじまった。地球でチャンピオンにならなければ、捕食されてしまうからだ。
もし地球が無限だったら、このエクスタシーはなかっただろう。
次々に新しい場所へ移動すれば良かった。人は、行き着いてしまった。地球に限りがあることを、身体が知ってしまった。
そしたら、食物連鎖の争いになる。人は、勝ち残った。ヨーロッパでもアジアでも、どこでもである。人以外の生き物が、食物連鎖の頂点にたった地域などない。
ホントは、人と人以外の生き物との、食物連鎖の争いだったのに、人が墓に入りはじめて、人を食糧にできなくなって決着がついた。
もう、人は、人を、食物連鎖ではないのだが、チャンピオンのエクスタシーを発揮させる場にしてしまった。
何千年も、この君主と民の時代は続いた。、誰が誰を支配するかといった思考にはまってしまった。
つい70年くらい前も、世界を２分して、わけのわからない戦いをした。誰が誰を支配するかという、チャンピオンのエクスタシーが発揮されてしまった。殺してしまうのだから恐ろしい。
恐竜は、人間よりもながい。１億６千万年だ。地球のチャンピオンだった。あんなに大きいのだから、恐竜以外の生き物は生き残れない。みんな食べられてしまう。ついに、恐竜は、自分を食べるしか生き残る道を失ってしまった。自分を自分が食べたら、最後はゼロになる。あたりまえのことだ。

人間は、あさはかだが、まだそこまでいってはいない。
話しが大きくなってしまったが、教え育む考えの背景は大事だ。
人にチャンピオンのエクスタシーがあることを承知しないといけない。オリンピックはなくならない。世界で１番速いコンピューターをつくりたがる。オリンピックをくだらないと言ったら怒られる。世界最速のコンピューターをくだらないと言ったら怒られる。
単に、人が、抱えてしまったチャンピオンのエクスタシーに過ぎないと言っているだけだ。もう人に刃向かう生き物などいない。なのに、まだチャンピオンを目指す。止めようがない。これはエクスタシーだから。
たかだか、70年前に、多くの人が亡くなった戦争をしたのだが、今は、誰も説明ができない。
フランスの英雄の時代や名古屋の殿様の時代には、支配できないチカラのなさを嘆くことはあっても、なぜ戦っているかなど、考えもしなかった。これは、エクスタシーだから、考えてもムダである。
ここ最近、もしかして、大昔の８家族と柵の時代に、人は戻るかもしれないという、淡い期待が出てきた。
大昔に、そもそも人が家族以外と集団を組んだのは、みんなが生活者だったからだ。
生活者は、全員が、少しの解放感を持っていることだ。誰かが拒否したりしない。あるいは、狼がいて、ゼッタイ的に支配されるとか、そういうことがないことである。
生活者の概念は大きい。
あたりまえのことだが、最初から支配者などいなかった。集団になったから仕方がないからリーダーをやった。
日本でも、１９４５年の敗戦から、少しの解放感を与えられて、気がつかなかったのだが、あなた達は生活者だからと言われた。
いきなり、大昔の、８家族と柵の物語に返ったのだ。誰も拒否しないから自由に生活してくれと言われたのだ。
生活者が現われる条件は、経済が市場経済社会であることと、少しの解放感があることである。
日本は、両方とも、１９４５年に、連合国から与えられた。

多分、それまでの日本の風習からして、自ら生活者になることは、難しいのではないかと思う。
世界の現状でも、２０１３年では、中東北アフリカで起っていることが、少しの解放感を得ることの、人の行動である。人は、みんなこうする。少しの解放感がなかったら反乱する。支配者は、少しの解放感を縮めようとする。例外なく、人が行動することだ。
日本では、中東北アフリカで今起こっているような、少しの解放感を得るリスクを負っていない。
おかしなことに、与えられた。
多分、日本では、与えられなかったら、自ら少しの解放感を得ることはなかったかもしれない。今では、わからない。
しかし、２０１３年現在では、日本は、市場経済社会だし少しの解放感状態だし、生活者が選挙でリーダーを選出するという、生活者主権の社会になっている。
つまり、２０１３年では、日本に支配者はいないことになる。ずっと、君主と民であったり、生産者と消費者であったり、資本家と労働者であったりしたのだが、やっと、２元では語れない、生活者が定着した。
話しがながくなったが、生活者主権の社会であることを、先に、確認をしておきたい。
なのに、教え育むとはどういうことなのか。
生活者主権の話しをして、教え育むを考えると、教え育くむが、大人という支配者と子どもという被支配者になってしまう。
おかしなことに、教育という言葉の呪縛にはまってしまっている。
こういうものを壊さないといけないのに、人は、壊すより、ズラして使おうとする。使うことなど必要ない。教え育むなど、壊してしまえばいいのだ。死語にすればいい。
教育という言葉を死語にすればいいと言っているのだから、すごい怒られそうだ。
教え育むが、２元でものを考えていた時代の風習だから意味がないと言っているだけだ。

○教え育む先

話しがブレているのだが、教え育むがどこから来ているかを話したがっている。教え育むという考えはおかしいのではないか、時代遅れではないかと言いたがっている。

２０１３年においても、学校の場で、いじめによる自殺があったり、体罰問題があったりして、教え育む現場が混乱している。

多分、先生達も混乱しているし、親達も混乱しているのだろう。

すべての矛盾は、教え育むという言葉にある。

この、大昔の、支配者と被支配者の関係の時代にあった、教え育むという言葉を、いまだに使っているからだ。

世界には、いまだに、支配者が存在する国もあるのだが、その国にピッタリした言葉である。

そこでは、教え育むことに、誰も違和感を持ってはいないだろう。

しかし、残念だが、まだ支配者らしき人がいる国家も、次第に少なくなる。

教え育むということばは、それでもガンバって生き残ろうとするかもしれない。

理由は一つである。

教え育むということばの中で暮らしている人がものすごくたくさんいるからだ。

教育の構造の中には、多くのポジションがある。教え育むということばは、支配者がいない社会では時代遅れだというもっともらしい話しで壊されたら、多くの人が困る。

だから、抵抗するどころではない。そもそも、教え育むなることばが古臭いなどといった話には見向きもしない。

教え育む構造の中で暮らしいるだけではなくて、たとえば、金属加工の会社に勤めていても、教え育むということばが時代遅れだという話しを、聞き流すだろう。

それほど日本では、教え育むという言葉に、違和感を持っている人が少ない。どちらかというと、教え育むということばについては、自分は、観客席の人間であるといった態度である。教え育むことの専門家の問題だと捉えら

れている。
おかしなことに、教え育むは、家庭にはないかのようである。
家庭でも、２０１３年的な生活者の家庭では、家庭での教え育むは、不適当である。そぐわないと思っている人が多い。しかし、生活者ではない、家系的な構造を保つ家庭では、依然として、家庭での教え育む考えは、残っている。
つまり、教え育むは、支配者から被支配者への教えを指導する行為なのだ。いいとかワルイではない。支配者の時代が、人間の社会では、何千年も続いているのだから、支配者の考えを、被支配者に伝えることは、すごく大切なことである。
私が、すごく不思議だと言っていることは、もう誰が支配者かわからない時代に入っているのに、言葉が変わらないから、あたかも、自分が支配者側にいるかのような錯覚をしてしまう人も現われてしまうことをも言っている。
自分が教え育まないといけないと思ってしまうことを言っている。
少なくとも今の日本では、教え育む側の人はいない。いないというか、必要ない。
日本では、支配者がいなくなって、生活者が支配者になって、１００年も経過していない。
教え育むことに関しても、いまだ、支配者が被支配者に対して教え育む感覚が抜けない。教え育むことだけではない。経済社会も生活者の社会に入っているのだが、メンドーなことになっている。
供給経済社会のままである。マーケットも、供給経済社会の一員だから、支配者の指示だけでも、指標は動いてしまう。
市場経済社会を止めない限り、生活者が価値を決めることを改めない限り、支配者の指示で、経済が動いて継続することはあり得ない。
朝ごはんは１９０円じゃないとイヤだと言われたら、そうするしかない。いかに、朝ごはんは２９０円が適切だと支配者が言ったとしても、無視されてしまう。消費しているのは、生活者だから。
供給経済社会の支配者は、道路や橋を、消費のように考えていた。供給経済社会では、物資が主体だから、そうなっていた。いいとかワルイではない。そういう時代だった。

２０１３年は、市場経済社会である。高速道路運賃が高ければ、高速道路を通らない。新幹線より格安航空会社の運賃が安ければ、新幹線に乗らないで飛行機にする。
新幹線が安全だし望ましいと支配者が言っても無視されてしまう。それが、市場経済社会だ。税金や規制などで、支配者の指示が意味を持たせるように工夫をしている。
この支配者の指示が意味を持たせるように工夫をしていることは、教え育むことでも同じである。
日本の運営体制が変わって１００年も経っていない。美濃の殿様のように、オレが日本を統一して世界も統一するといった、生き物のエクスタシーをそのまま発揮する人も、いなくなった。いなくなったというか、あなたの時代ではないと、みんなに言われる。
しかしながら、残念なことに、教え育むということばは、その時代のことばであって、考えも、そのままなのだ。
ことばの呪縛が、社会を引きずって、新しくしない。せっかく、生活者主権という、大昔の、８家族と柵の物語に、人間の生きやすい体制に戻ったのに、教え育むなどという、支配者の時代を引きずったことばの呪縛が、新しい時代を生きる人に、矛盾をもたらす。
人は、残念だが、あまり、このようなことに気がつかない。ましてや、教え育むということばを、変えようとはしない。
言葉は人を呪縛する。

教育と衝突しない新しい考え

○期待される人材

私が、教え育む考えはおかしいのではないかと言っているのだが、最近の、教育界の諸々の出来事は、どうも何かあると感じている人が多くなっているのだろう。

このままだと、次々に、様々なことが起る。

私は、経済のことを書かせていただくことも多い。日本は経済的に滅んでいるところだと書く。

私は、日本には人材がいないと思っているからだ。どうして滅んでいるかというと、日本には、サンフランシスコの亡くなった田舎風のおじさんのような人がいなくなったからだ。

１人で何兆円も稼ぐような人だ。

日本では、ここ30年くらいで、みんなが目指すことが変わってしまった。

以前は、浜松にもすごい田舎風のおじさんがいて、お手本にしていた。すごい商品をつくってお金持にもなりたい人も多かった。

しかし、ここ30年くらいは、会社や公務員の職場が、みんな大きくて立派になっているので、どこに就職するかがポイントになった。

大きな船がたくさんあって、どこの船員になるかが大事になった。

自分で、会社を立ち上げるとか、商品を開発するとかそういうことではなくなった。

安定している、船の安全運転のための船員になることが、最も安定して、リスクも少なくて、収入も多いのだ。

社会が豊かだからこうなった。

豊かにしたのは、浜松の田舎風のおじさんたちである。

残念だが、30年前から、どうしたら自分が豊かに暮らせるかを、みんなで考えはじめた。

日本を豊かにすることは、終わったかのように思えたのだろう。

会社や国を豊かにすることは、結果でしかないから、目指してもできるもの

ではない。自分が豊かになることは、できるだけ大きな船の乗組員になればいいのだから、可能性が高い。
みんなで豊かになる競争をしている間に、もっと大きな集団社会は、静かに、壊れつつあった。
おかしなもので、みんなで下っているエスカレーターに乗っていたら、見えなくなる。
２０１３年の初春の状態では、株も高くなっているし、円も安くなっている。輸出することで暮らしている会社などは、大助かりである。
あたかも、景気はやっぱり循環するんだと、勘違いしてしまいそうな様相である。
景気やインフレやデフレなどのことばは、昔の供給経済社会の言葉だから、意味はない。
２０１３年の世界経済は、市場経済社会で動いているのだから、好景気の波がまた来るといった甘い考えに乗ることはできない。
滅んでいるからデフレのように見えるだけだ。
二極目の生活者は、新宿で、１９０円の朝ごはんを食べることがふさわしくなっている。
とても、ホテルで、１０００円のバイキングの朝食などは食べられない。大きな船の乗組員の出張でしか食べられなくなる。
一極目の生活者には、よく見えないだろう。滅んでくると、国家予算などは、ほぼ一極目の生活者に向けられるかのようになってしまう。２極目の生活者や、もっと滅ぶと現われる三極目の生活者は、社会保障中心になっていく。
滅ぶ社会の鉄則である。社会の予算は、一極目の生活者に向けられる。
２０１３年の日本では、教育ということばは、次第に、一極目の生活者に限られてしまうかのようになっている。お金がないと、教育がチャンと受けにくい。塾に通うのが手っ取り早い。塾に通えるのは、お父さんかお母さんが一極目の人の子どもに限られる。
２０１３年の教育というのは、教育したお墨付きを社会からいただく制度だと、私は思っている。
よろいの意味が大きい。

お墨付きは、大きな船の乗組員になることでは重要な意味があるが、自分で船を立ち上げるとか、世界の生活者の役に立つようなヒット商品を開発することなどできるものではない。
お墨付きがあっても、個人的には意味はあるが、社会の役にはたたない。
２０１３年の日本社会は、ジワっと滅んでいるので、ますます、お墨付きをもらえる人は、限られてくる。
お墨付きを発行する大学だって、ジワっと滅んでいく。数が少なくなる。一極目の生活者だけでは、大学は維持できない。
暗黙のうちに日本社会にできてしまった期待される人間像は、滅びる日本をくい止められる人ではない。
残念だが、自分の豊かさを追える人だ。社会が豊かになることは、自分の役割ではないと思っている。もっとも、生まれた時から日本が豊かだったのだから、社会が豊かになることがどんなものであるのかなど、誰も知らない。
お手本もいなくなっているから、社会を豊かにする学習などできない。
こうやって、社会は、一旦滅びはじめたら、とことん滅んでしまう。だいたい、遺跡が残るしかないくらいにまで、滅ぶ。昔であったら、東京がなくなる。東京が滅んで、大阪になる。東京は、残骸だけが残る。
大昔から、街社会は、こうなって、次々に栄えた都が変わっていった。
みんな、財政赤字をチャラにしただけだ。戦争をするか滅んで遺跡にならなければ、財政赤字をチャラにはできない。
２０１３年には、地球を２時間で１周する人も多くなってきて、あんた達を滅ぼさない。あんた達が滅んだら、地球のみんなが困る。みんなで段ボールに暮らしても、借金は返してくれになる。
２０１３年には、滅ぶことさえできなくなっている。
期待される人間像が変わってしまった日本では、滅びる社会をくい止めることが難しい。

○教育とぶつかってはまずい

教え育むなどという不遜なことばは、支配者が発する言葉であって。支配者などいない、２０１３年の日本社会では、望ましくないことばである。こ

の、教え育むという言葉のために、この枠の中に、人材養成が留まってしまう。
たった50年前にあったのだが、みんな貧しくて、豊かになりたくて必死に働いたことは何だったのか、今では、理解ができない。
貧しかったから教育もできなかったのだが、おかしなことになってしまった。
豊かになったのに、教育は、豊かになるためのお墨付きを与える仕組みになってしまった。
こんなはずではなかった。
もう遅い。
これを取り戻すことは難しい。
たった30年くらいの間に、豊かになるお墨付きを発行する仕組みが完成しているのだ。
教え育むなどという不遜なことばが教育であるなどとは、言ってはいけない。
教え育む仕組みは、すごい強力なシステムになっているのだから、戦ってはまずい。
このシステムは、見えざる悪魔になっていて、もう、終焉に近い。
この教え育くむという言葉をコンセプトに形成されているシステムに刃向かってはいけない。終焉に近いのだが、日本の社会が、まだ借金ができる間は、終焉に近いまま、続いてしまう。
大きな国家予算が注ぎ込まれる。
ますます、日本の教え育むシステムは、豊かになるためのお墨付きを発行するにふさわしい姿を鮮明にする。
もう、人のあるべき姿などということばが、遠くにあるだけだ。あなたが幸せだったらわたしが幸せだと言えるのは、テレビドラマの中でしかなくなるかもしれない。
豊かになるお墨付きを追うと、グレードができて、お金がないと、高いグレードのお墨付きがいただけない。二極目の生活者などは、はなから、そんなものは信じていない。二極目の人達は、スマホの使用料とコンビニの弁当とシェアーハウスの家賃代の手当てにキュウキュウとしているだけだ。豊か

になるお墨付きなど諦めている。日本の社会は滅びているから、時々刻々と、こんな、豊かになるお墨付きを追えなくなる。
二極目の生活者は、日本の豊かになるお墨付きを発行するシステムをよくわかっているので、こんなことに、反対はしない。ますます、自分の存在をワルクする。無視するだけだ。
日本の教え育むシステムは、権力だから、その構造に刃向かってはまずい。権力になってしまったのは、教育ということばがいけないからだ。誰かが、教え育まないといけないと思ってしまう。
言葉に呪縛される。
生活者は、２０１３年の日本の権力者なのだが、まだ時間が足りない。70年くらい前に、戦争で負けて与えられたのだから、自覚が足りない。
依然として、誰かを待っているかのように思える。
ホントは、生活者が権力者なのに、選挙の度に、支配者のような発言をする人を選んでしまう。おかしな状況である。
まだ３００年くらい必要なのだろう。生活者が、自分で自分を受け止めるまでに。
それまでに、滅んでしまわなければいいが。滅んで、また、支配者が現われると、メンドーなことになる。
教え育むシステムが、支配者が、豊かになるお墨付きを与えるシステムになってしまったのだが、その枠の中に、スポーツ競技者にチャンピオンになるお墨付きを与えていることもわかってきた。
こちらも、教え育むシステムなのだが、陰のスタッフは、ゼンゼン異なっている。
これは、社会が豊かになったから、曲がってしまったのだ。
あるべき姿の人を形成することが望まれるのに、豊かになるお墨付きを発行したり、競技でチャンピオンになるお墨付きを発行したりすることは、哀しいことだ。
みんな豊かだから、誰も不思議に思わない。二極目の生活者と三極目の生活者は、不思議というより、諦めて無視している。自分は係りたくない。オリンピックを東京でやると言っても、関係ないと思っている。賛成でも反対でもない。

政治家や日本の陰のスタッフは、ますます少なくなってしまう一極目の生活者しか見ないから、大きく、見間違う。日本の社会の実態は、一極目の生活者にはない。滅んでいるのだからあたりまえである。
こんな難しい社会だから、豊かになるお墨付きを発行したり、競技でチャンピオンになるお墨付きを発行したりするシステムと戦わない方が好ましい。権力なっているからだ。
勇気を出して反乱する人もいるだろうが、挑戦者のつもりにならないとダメだ。挑戦者とは、いずれ自分が殺られてしまうことを承知して、見えざる悪魔に戦いを挑むことだ。
片足に保険をかけて、自分のために、見えざる悪魔に挑戦をしたら、結局、ムダな戦いになる。
ここ数日、チャンピオンになるお墨付きを発行するシステムで、意外なことが起きた。
私は、挑戦者のはしくれだから、身体が戦う方に無条件で動いてしまう。
しかし、挑戦者ではないのだったら、戦わない方がよい。見えざる悪魔は、すごい。江戸の末期に、江戸幕府に挑戦したかのように、結果的なった人達は、みんな、消された。
豊かになるお墨付きを発行したり、競技でチャンピオンになるお墨付きを発行したりするシステムは、見えざる悪魔である。
そういうつもりは、誰にもなかった。見えざる悪魔は、崩壊を最終目的にする。
それなのに、こうなってしまうのは、人間だから仕方がない。見えざる悪魔には敵わない。また誰かが命を賭けて挑戦するしかない。壊すことだ。
壊さないといけない。
このままだと、日本の社会の滅びを促進する。残念だが、日本の社会が豊かになったから、こうなってしまった。
人間社会は、みんなこうなる。
経済的な豊かさなどには、人間のあるべき姿などないと思うのだが。
今後、インドの人達が、世界１の経済大国になるのだろうが、「オレ達は肉は食わない」「オレ達は質素に暮らす」「オレたちはあんたが幸せだったらオレが幸せの姿勢でこれからも生きる」と言って欲しいものだ。

日本の社会だって、可能性があった。みんな親切で、お互いを気遣う。それなのに、こんなになってしまう。残念だ。
もうこうなってしまったら、権力には戦いを挑まない方が好ましい。
教え育むなどという不遜な言葉を掲げてなどいったことを、言わない方が好ましい。

○自分なりの新しい考え
支配者が、自分の考えることを植え付けたかった教え育む考えとシステムは、２０１３年の日本では、豊かになるお墨付きを与えるシステムになっている。
これがよくないと思うのだったら、自分なりの新しい考えをつくるしかない。そして、その新しい考えに沿って、自分なりの教育に変わる何かをすることが好ましい。決して、２０１３年の日本の教育界とは、戦ったりしないことが好ましい。
教育に変わる新しい考えなどあるのだろうか。
私であれば、教え育むが不遜な言葉と言っているのだから、普段から、教育という言葉を使わない。
私は、普段から、教育という言葉は使っていない。
私は、けっこうたくさんの本を書かせていただいているが、教育なる言葉を書いた記憶がない。本の中で使わない。それもあるが、普段の生活の中で、教育を使わない。
使わなくても、何も不便はしない。
フツウの生活の中では、教育のことばが出るような局面もない。
生活者には、多分、教育という言葉は、必要ないのだろう。私が使わないだけではなくて、生活者は、教育を使わない。
「あなたはお子さんの教育をどのようにお考えですか？」
こんな聞き方をされることがあって、教育という言葉に触れるくらいのものだ。
「剛の教育どうしようか」
こんな会話もすることはない。

教育という言葉は、口語では出てこない。
お笑い芸人の話しにもならない。
小学校の先生に聞かれることが最初かもしれない。
「お子さんの教育についてどのようにお考えですか？」
多分で申訳ないが、教師になると、いきなりこうなるのだろう。
いきなりとは、上から目線のことだ。
教え育む側になるのだろう。
教師でも、こんな教師ばかりではないと、お叱りを受けるかもしれないから、多分をつけている。私には、教師の経験がないのでわからない。
私は、保育園の園長を３年やらせていただいた。そこでの教師のような役は、保育士になる。
保育士も、フツウは、お互いを先生と呼ぶ。教師と同じである。
私は、これを壊さないといけないと思ったので、私を園長とは呼ばせなかった。さんである。保育士は保育スタッフだった。さんである。お母さんと子ども達と、保育のスタッフは、フラットな位置にしておきたかった。
お互いを先生と呼んだりするのは、よろいであることがフツウである。ホントに尊敬されるような人に先生と言ってリスペクトを表現することとは異なる。
教師でも、お互いを先生と呼ぶことは、よろいである。仲間だからさんでいいのではないかと思う。
私が園長だった３年間は、フツウの方から見ると、違和感があったと思う。お母さんだって、すぐに、スタッフを先生と呼んでいた。私には、すごく違和感がある。
私たちは、お母さんが、お母さんをできない時間に、あなたに代わって、お母さんをやっている。現代では、お母さんのプロがいなければ、女性が、キチンと社会と向き合って存在できないと信じていた。
今でも、そう思う。
保育園の保育士は、お母さんのプロであって、お母さんと２人で、子どもと、生活している。
私は、子育てということばも使わない。子育て支援プロジェクトなどいういった行事があったりする。私には、意味がわからない。ホントに、ゼンゼ

ンわからない。
子どもは、育てるわけではない。子どもが自分で育っているのをバックアップすることが、親の役割だと思っているし、保育士の役割だ。
子育てなどという不遜なことばは、私は使わない。子育て支援プロジェクトなどあると、パフォーマンスで何かをしているかのようにしか見えない。私には、そうとしか見えない。
現に、多くの、支援プログラムがあるし、多くの子育てに関する専門家もいるのだが、子どもの数は多くならないし、虐待をするかもしれないと答えてしまうお母さんの割合を、少なくすることもできない。
私には、教え育むという考えからきていると思う。子育てという言葉もだ。みんな、支配者が被支配者に向ける言葉である。
「あんたの子育てはさ～」
こう言ってしまうお母さんもいるから、教育に比べて、子育てという言葉は、生活に近いのだろう。
私には違和感があるが、それは仕方がないだろう。
お母さんと子どもの関係では、お母さんは支配者であって、子どもは被支配者である。
だから、子育てということばを、不遜な言葉だとは気がつかない。
私は、会社にながく勤めていた。
会社でも、たくさんの教育プログラムがある。新入社員の教育プログラムなどは、どこの会社にもある。社員のグレードを上げるというか評価する教育プログラムもある。
お互いに競争しているから、公平だと思えるような待遇を考えないといけない。
誰１人として、会社の中の多くの教育プログラムを、教え育むというのは不遜な言葉ではないかと、思うような人はいない。
会社というのは、支配者と被支配者が歴然と存在する、おかしなところなのだ。
美濃の殿様の時代とあまり変わらない。
「オレが権力者である」
態度からして、そういう人が、だいたい社長をやっている。

社員に、どういう教育をしたらいいのか、意見を聞くことなどもない。教育の言葉そのものなのだ。昔の支配者が、自分の考えを植え付けたくて教育することが、いいとかワルイではなくて、会社には、フツウにある。
私には、会社は変わらないといけないと思ってしまう。会社は、時々不遜になってしまう。会社が存在するのは、三方一両得だからだ。三方とは、お客さんと商品と商品を創ったり販売したりする陰のスタッフのことだ。会社の社員は、みんな陰のスタッフである。私は、40年くらい、会社の陰のスタッフをやった。
この、三方一両得をキチンとやっていると、市場経済社会では、会社はやっていける。生活者が見えなくなることはない。２０１３年では、アキバの娘達が日本のヒット商品である。
最近まで、電力は、生活者に買っていただいているものと思ってたのだが、福島の原発の事故があって、電力のお客さんは、会社だったことがわかった。会社は、お客さんにはならない。会社は、物資を買って商品にしている所だから。電力は物資なのだ。
会社は変わらないといけない。
今時、教育が、会社の勝手に行われることを、誰も不思議に思わないのだから。これでは、会社におけるパワハラなどなくならない。会社に勤めると辛くなるのは当たり前である。
新入社員が、これほどの就職困難時代にもかかわらず、３年以内に30％が辞めてしまうのも、当然である。
今時、言うことを聞かなかったら切り捨てるという、どこかの殿様のような雰囲気では、若者は暮らせない。ホントは、暮らす必要がない。
こんな感じでは、日本の社会が滅びることを、会社が助長する。会社だって、多くの迷える羊を社内に抱えることになる。
私は、教え育む言葉など不遜だと言っている。誰が誰を教え育むのか。支配者などいない日本では、おかしいと言っている。
しかし、会社では、そのまま、教育という言葉が当てはまる。
「オレの会社の方針はオレが決める」
教育界では、そこまではない。理事のような人がたくさんいて、合議制になっている。美濃の殿様のようではない。

しかし、殿様が勝手に、教え育むことを決めようが、合議制で理事が集まって決めようが、支配者が被支配者に対して、教え育む感覚は同じである。
「あなたたちを私の考えに沿うようにしたい」
私は、人は、自分で育つと言っている。
この書のタイトルは『自分で育つ』だ。
すごい大きな違いがある。
私など、自分が育つことに、とやかく言われたくない。
「あなたには、こういう特性があって、今後は、こういうスキル向上に心がけていただきたい、そうすれば、マネージャーにふさわしくなれる」
私は、何も覚えていないから書けない。そんな書類を、40年も会社に勤めていると、封筒に溢れるほどいただく。あたりまえだが、大事にして保管しておくことはしない。
私がどうなるか、あなたにとやかく言われたくはない。陰では、こう思っている。いた。
それでも40年間勤めていたのは、理由がある。私は変革者だからだ。これくらいのことを怒って投げ出したりしたら、挑戦者にも変革者にもなれない。
私は、こういうことを変革したい。その会社だけは。
だけど、できた部分とできなかった部分があった。もう過去形で書かないといけない。
それでも、私は、何度も危ないことがあった。
私は、それは書かない。封印している。これからも封印する。
私は、この会社のシステムは、変えないといけないと思っていた。今でも思っている。しかし、もっと変えないといけないことが会社にはある。
私には、そっちの方が大事だった。
『喫水ー変革者』『ブルーセダンとの戦いー変革者』を読んでいただきたい。
日本の会社で、教え育むを不遜と思って不思議に思う会社などないだろう。
会社とは何かを真剣に考えないといけない。
会社は、日本の経済社会の１つの細胞だから、細胞の１つ１つが活性化しないと、日本全体の経済社会など、活性するわけがない。
そしたら、みんながパワーを最高に発揮するにはどうすればいいのか、考え

ないといけないだろう。
そう考えていけば、会社の教え育むも、不遜だと気がつくかもしれない。時代遅れなのだ。供給経済社会のシステムなのだ。
市場経済社会は、生活者と商品が主役である。

○おもしろいということ

教え育むことについての、自分なりの新しい考えをつくることについては、おもしろいを抜かしては、成り立たないかもしれない。
人は、いいとかワルイを抜きにして、発育して次におもしろいが発現する。そのようになっている。
発育するは、遺伝子のコンセプトが中心であるが、おもしろいは、優秀な頭脳のコンセプトが中心である。遺伝子のコンセプトは、生き残ることであり、後に繋げることである。
優秀な頭脳のコンセプトは、わからないことを明らかにすることであり、おもしろいがキーワードである。
いいとかワルイではないので、人は、おもしろくないことは、何もしない。
生まれてどこまでが発育のコンセプト中心であるかというと、生き残ることのためにやっているかどうかでわかる。
７才で歯が生え替わるのだが、これは、生き残るためだ。しかし、おもしろいは、とっくの昔に発現している。
だから、中心とする以外にない。７才では、ほぼすべてが、おもしろいで動いている。
歯磨きのしつけをするのだが、歯磨きのしつけは、生き残るためではないので、おもしろくなかったらやらない。
だから、「お母さんは、歯磨きのしつけしていますか？」といった、こんな質問を、お母さんにしてはいけない。
お母さんは、義務的に、かれらに、歯磨きをしつける。
これではおもしろくない。ましてや毎日である。なにか、おもしろくなる工夫をしなとムリである。どうしてもおもしろい工夫がないのなら、お母さんが、毎日欠かさず歯磨きをすればよい。かれらが、私の歩くのを、じって見

ていたように、同じことをしようとして、観察する。待てば、必ずやってくれる。強いることは、おもしろくなければやらない。
教え育むには、おもしろいなどない。しつけにもない。子育てにもない。
すべて、支配者サイドから被支配者サイドに向かっている言葉と行動だからである。
おもしろいは、かれらが発育の後に発現させるものだから、かれらは、おもしろければ、何でもやる。
もともと、おもしろいは、生まれた時から持っている。お母さんの顔を探すのは、生き残るからだけではなくて、おもしろいからだ。
だから、発育が中心だが、生まれた時からおもしろいはある。
ただ、ある時期から、生き残ることだけの発育の行動は、少なくなる。
階段を登ることがおもしろい。
「ダメ～！」
こっぴどく怒られるのだが、おもしろいから、お母さんの目を盗んでは階段を上がる。上がったはいいが降りられなくて、仕方なく泣いてお母さんを呼んで、バレてしまう。
こんなことは、日常茶飯事になる。
縁側をつくっていた。縁側から庭に降りたら危ない。回り道になるが、
「こっちを通って」と言っても、保育士の目を盗んで、縁側から庭に降りる。これがフツウである。おもしろいのだ。
教え育むことになると、勉強というものが出てくる。勉強とは、おかしな言葉だ。
勉を強いることだ。努めるを強いると同義だ。
教え育むことは、勉を強いることであると言っている。支配者が言っている。
おもしろいことは、不真面目であるかのように捉えられる。
ここ数日、体罰問題で揺れている。日本の教育界とスポーツ界が揺れている。
教え育むことは、勉を強いることであると言っているのだから、強いる効果が薄かったら、体罰もあるだろうと、当然のことながら想像してしまう。
かれらが、あかちゃんの頃から自ら学習するキーになっているおもしろい

は、封印される。
教え育むことは、勉を強いることだから、封印しないとムリである。
以降、勉強という言葉が、大きくのしかかる。
「あんた今日は勉強したの？」
２０１３年では、豊かになるためのお墨付きをいただくためには、教え育むことを、勉を強いて行わなければならないのだ。
こんなことでは、サンフランシスコの田舎風のおじさんは育たない。隣に大統領がいてもおかまいなしだろう。勉を強いて何かをやっているわけではないし、自分が育つことに、とやかく言われたくない。大統領にさえも、何も言われたくない。
教え育むことを、勉を強いて行わなければならないなどとは、少しも思ってもいない。
おもしろいとバッティングしてしまう。
教え育むことを、勉を強いて行うは、身体に染みているおもしろいとぶつかる。
教え育むことを、勉を強いて行なうは、身体にはない。
スポーツはおもしろいからやっているのであって、それだけだ。金メダルが欲しくなると、よろいになって、教え育むことを、勉を強いて行なうになってしまう。そんなことは身体にないので、強いる効果が出なかったら、体罰も起きるだろうと、想像する。
私も長くスポーツをやっていたからわかる。
しかし、私は、今のように、おもしろいは身体に備わっているが、教え育むことを、勉を強いて行うことなどは、身体に備わっていないなどとは、気がついていなかった。
それなのに、私は、１度も体罰など体験したことがない。やられたこともないし、やったこともない。どうしてか、考えてみるのだが、わからない。私の身体は、ハナからわかっていたのではないかと思う。

自分で学習して自分で育つ

○学習ということ

私は、人は自分で育つと言っている。
もし、人に、自分で育つチカラがなかったら、胎内で自分で育たない。あたりまえのことだ。あかちゃんが、胎内で何をしているのか、お母さんには見えないので、何もわからない。
生まれたらすぐに襲われることが多いから、獣の匂いなどを覚える。遺伝子かカミサマが、必死になって、お手本を示しているのだと解釈することが望ましい。
お母さんの匂いなどは生まれた時には完璧に覚えている。隣の子のお母さんと間違えることはない。これは、人の子だけではない。ブタでも同じである。おっぱいを飲むことも、生まれた時には、完璧に機能を完成させる。大人にもできない難しいことを、どのようにして学習しているのか、わからない。多分、ずっとわからないだろう。
胎内では、お手本がないので、遺伝子かカミサマがお手本を示しているのだろうが、生まれてからは、主として、お母さんが、あかちゃんが自分で育つお手本となる。
私など、園長時代には、いつも、子ども達に、歩く姿を見られていた。じっと目で追われているのを感じていた。
「オレはできないけどどうしているんだ」
こんな目で、かれらは私を注視していた。私は、いつも、かれらの目を意識していた。少しはお手本になれるように、カッコ良く歩かないといけない。
かれらが保育園ではじめて自分でスプーンで食べる時、すでに、どうすべきか、自分で決めている。保育園ではそうだ。
かれらは、ずっと、先輩の様子を観察していた。私はスプーンでごはんを食べないのでお手本にはならない。私と２人で暮らしたら、０才でも箸を使おうとして、とんでもないことになる。箸使いなどは難しいから、いくら学習してもできないものはできない。手の機能が追いつかない。３才を過ぎない

と、手が成長しない。だから、私がごはんを食べるのを見て、箸を使いたがるのだが、ムリである。
私は、箸で食べる方がおいしいのだが、スプーンでごはんを食べる。しばらく、そうしないといけない。
保育園で暮らしていたら、そんな心配はいらない。お手本がたくさんいる。かれらは、興味津々なのだ。
かれらは、ずっとこうして暮らす。自分で学習して自分で育つ。自分で、そんな意識はないのだが、身体がそうなっている。
大事なのは、自分で学習する条件である。自分で学習する環境である。
かれらは、コンセプトが大事だ。お手本が大事である。自分で学習するためのモノが必要である。
この３つが揃わないと、自分で学習するチカラはあっても、学習はできない。
かれらは、ずっと、大人が自分のことをよく知らない間、うまくいく。
大人として、とやかく言わないからだ。教えたがらない。大人とは、どうもおかしな生き物である。なんでもすぐに教えたがる。そして逆もある。自分を追い越そうとしたら、いきなり何も教えなくなる。
大人は、教えるという言葉の魔力に囚われている。そこから逃げられない。
そういう大人も、かれらが０歳の時に自分で学習して自分で育っていることには、何も口を出さない。
そもそも、大人は、０才のかれらが、何を自分で学習しているのか、知らない。
８カ月頃に歯が生えてきて、スリッパをかじるのだが、「バッチー」と言うだけで、かれらが、何をしているのか理解できない。多分誰も理解していない。歯根膜を鍛えているのだが、そんなことなど、かれらしかわからない。
ここで歯根膜を鍛えておかないと、これからずっと食事をするのに、スルメのようなものがあったり豆腐のようなテクスチャーの食べ物があったりするので、それに対応できるように、歯根膜のソフトを蓄積しているのだ。鍛えている。
スリッパは最適だが、お母さんに怒られる。
このように、かれらが０才の時に、自分で学習して自分で育っていること

を、大人は何も知らない。
かれらは、自分の思うようにできる。
ところが、歩きはじめることや箸使いや洗顔や歯磨きなどになってきて、いきなり教えたくなる。大人はみんな同じである。日本ではしつけと言う。おかしな言葉である。
教え育むもおかしいし、わたしの子どももおかしいし、子育てもおかしいし、しつけもおかしい。
かれらから見たら納得がいかないことを、私がおかしいと言っている。
かれらは、納得がいかないなどとは考えない。あまりにも、自分にとって、未知なることが多いからだ。毎日毎日、新しい出来事が起る。最初に自動車を見た時など驚いてしまった。今はもう慣れた。
最初に風船が割れた時など驚いた。大きな音にも驚いた。
毎日毎日、新しい出来事が起る。
お母さんが、歯磨きの仕方を教えることだって、その一環である。なんでもない。
私から見ると、おかしい。
かれらは、ここまで、自分で学習して育ってきたのだから、歯磨きなども、そうすればいいと思う。教える必要などない。ハイハイのお手本がないとハイハイしないと同じように、歯磨きのお手本は必要なのだ。
ここいらあたりから、ずっと、ズレてくる。
自分で育つにもかかわらず育てるになってしまう。なんでもである。あたかも、わたしが教えているからこの子は育っていると勘違いしてしまう。
うまくいく例もあるのだが、自分ができなかったことを、子どもに教えてみたりする。
お手本だったらいいのだが、一般的に、次第に、わたしの子どもになっていく。
「この子は、今なにを学習しているのかしら」
こう感じていただけると、すごく上手くいくと、私は思う。
大人は、かれらが、自分で学習して自分で育つことをバックアップするというコンセプトを、守らないといけないと思う。
保育園になっても幼稚園になっても、小学生になっても、この流れは、同じ

である。
大人は、みんな同じようにする。
だいたい、ここから先は、みんな先生である。家族ではない大人は、先生ではないので、聞き流す。なにを言われても真剣に聞かないでいいことになっている。時々、自分の先生ではないのだが、社会的な先生という人がいて、この人達の言うことは、真剣に聞かないといけないらしい。
かれらから大人を見ると、こうなっている。親は、また特殊である。いろいろ教えたがる。
かれらは、ずっと、胎内にいる時から、自分で学習して自分で育ってきた。ただ、自分で自覚がないから、「オレは教わりたくない」などとは言わない。
そこが残念なところである。
次第に、教え育むがフツウになる。自分が学習して自分で育っている自覚さえあれば、違和感を持つのだろうが、残念だが、違和感すらない。
したがって、自分も親になったり教師になったりすると、同じようにする。
自分なりの教え育むを考えている。
受身的に構えていたら、社会的な常識である、教え育むという、支配者から被支配者への一方的な教育になってしまう。２０１３年には、それが、豊かになるためのお墨付きのを与える仕組みになってしまっている。
そうではなくて、人としてあるべき姿に、自分で学習して到達することが望ましい。そのうえで、自分の特長として、医師であったりエンターテナーであったりすることが好ましい。
教え育むが少し曲がってしまうと、人としてあるべき姿など、誰も気づかなくなる。
事件ばかりが多くなる。

○自分で学習するコンセプト

教え育むことを、勉を強いて行うようなことは、人の身体にくっついていることとは、バッティングする。
だから、教え育むではなくて、自分なりの、学習して育つことを考えてい

る。
剣道など辛いばかりだと思うかもしれないが、やってみると、おもしろいものだろう。間違いない。こんだけ多くのスポーツがあるが、みんなそうだ。おもしろいから続いている。
自分なりの、学習して育つことを考えるには、教え育むという決まりきった枠から脱しないといけない。勉を強いて行うことから脱しないといけない。
ずっと、教えられるまで受け身的にしていたわけではないのに、いつの間にか、何かを教えられるまで、自分で何もしなくなってしまう。勉を強いることを、フツウのように受け入れてしまう。
誰でもが、こうなってしまう。
「あんた勉強したの？」
１日に何回聞くかわからない。
かれらが、ずっと、自分で学習して自分で育ってきた姿勢を、維持するためには、大人の、少しばかりの気遣いがないと難しいかもしれない。
そうでなかったら、かれらは、大人に反乱することになる。
もし、かれらに少しばかりの気遣いをするのであれば、学習のコンセプトも、気遣ってあげるとよい。
教え育むことを勉を強いて行うを、おもしろいから行うに、転化させることが好ましい。
かれらが０才の頃は、自分で学習しておもしろいことをやることに、誰も反対しなかった。大人は、何をしているかわからなかった。発育することなど、大人はわからない。
しかし、１＋１などは、大人にわかりやすい。
そもそも、教え育むことを勉を強いて行うことなどは、大人にわかりやすくできている。
必ずバッティングしてしまう。
おもしろいをキーにして自分で学習して自分で育つことと、教え育むことを勉を強いて行うことは、必ずバッティングする。
権力者の方が強いのだから、教え育むことを勉を強いて行うことに、コンセプトが傾いてしまう。
おもしろいというコンセプトは、封印して、ゲームとしての別の世界だと思

わせる様をした遊びの中で、おもしろいを追うことになる。
２０１３年には、おかしなことになっている。
おもしろいは、人に備わっていることなので、おもしろいを追うことを自分が拒否できない。
私は、昔、教え育むことを勉を強いて行って、良い成績なることが、おもしろかった時期がある。ホントは好ましくない。競争のおもしろさに過ぎないからだ。しかし、おもしろいを持ち込めば、教え育むことを勉を強いて行うことも、おもしろいという枠内に収められることもわかっている。
自分で学習するコンセプトのことだ。
なかなか、現実の生活の中で表現することは難しい。
私が、ずっと書き続けている小説に『わたしと私』という物語がある。実際は、『見えざる悪魔ーわたしと私００７』というように、あるテーマが、１冊１冊あるのだが、話しは連続していて、わたしと私の物語である。
１９９２年の暑い夏の１日に、わたしと私は、はじめて出会った。
そして、２０１３年には、わたしは、社員が２万７千人もいる、世界企業の社長になっていて、子どもが５人いる。１番下の子は、まだ保育園に行っている。
わたしと私は、この、教え育むことを勉を強いて行うという大人のコンセプトに、そのまま従うのではなくて、少しの手助けを、５人の子どもにした。
やりたかったことは、５人の子どもが、おもしろいをキーに自分で学習して自分で育ってきたそのままを引き継ぎたかった。
わたしと私は、何をしたかというと、おもちゃ箱をひっくし返したに等しいことをした。土曜の朝は、みんなでサッカーの練習をした。サッカーは上手になりたい。同じように、ピアノも全員でやった。ピアノは、子どもが自分で勝手に先生を探してきて、明日から行くからと言った。
スポーツジムも全員で行っている。もちろん７人だ。世界中を旅している。しょっちゅう山に登る。
「あんたがやりたいことを選んで」
こんなことを言ったことがない。
みんな、おもしろい。
全員がパソコンと財布を持っている。

自分のことは、自分でやりたい。お母さんにお金をくれなどと言わない。２０１２年までは、食器洗いなどの家内アルバイトの小遣いだったが、みんな、それぞれ、特技を活かして、仕事をはじめた。まだ小学生であるが、会社を持っている。子ども達の会社が５つある。それぞれやっていることはまるで異なっている。次男などは、ロボットのプロトタイプを会社に売っている。
５人の子ども達は、算数の勉強は、キチンと学校でやる。とっくの昔に、エクセルで仕事の見積もりをやっているので、算数ができているが、教室での算数は算数だ、それだけのことだ。
わたしと私は、おもちゃ箱をひっくし返したことが幸いだったと思っている。５人の子ども達は、おもしろいから、毎日学校に行くし仕事をしている。最近は、大学へも入学した。勉強ではない。研究室をもらっている。上の４人の子どもである。
わたしと私は、ずっと心配だった。
学校の算数の時間にロボットをつくるのではないかと心配した。算数などわかりきっているから。
「先生が困ることはしない」
わたしと私は、ホットして感心してしまう。
『わたしと私は』現在も続いている。
『わたしと私』では、このように、教え育むことを勉を強いて行うという大人のコンセプトと、おもしろいをキーに自分で学習して自分で育ってきたそのままを引き継ぐことを、融合させたようになっている。
物語だからできているのかもしれない。現実の生活では、なかなか難しい。そもそも、かれらが、自分が生き残ろうとして、自分で学習して自分で育っている実態を、大人は知らない。
大人は、かれらの、優秀な頭脳が主体的に動きはじめて、教え育むことを勉を強いて行うことに興味がある。
かれらから見たら、いままで何も言わなかったのに、いきなり、命令的に、生活全般について、とやかく言いはじめる。
大人から見ると、かれらは、大人の未発達な人と映る。だから、教え育むことを勉を強いて行わないといけないと思ってしまう。

コンセプトが、全く異なっている。
日本では、あなたは大人の未発達な人だから、わたしがあなたを教え育むことを勉を強いて行うと、大人が言って実行してしまうことが、フツウだし常識である。
ここで言うわたしは、親であったり、保育園や幼稚園や学校の先生である。
ここでは、教え育むことを勉を強いて行うことに少しの疑問を持って、自分なりの新しい考えを持とうとしていることが前提になっているのだから、あえて、学習のコンセプトも、新しくしないといけない。
そしたら、おもしろいをキーに自分で学習して自分で育ってきたそのままを引き継ぐというコンセプトが適切である。

○自分で学習するお手本
日本の常識的な、教え育むことを勉を強いて行うというコンセプトと張り合うことではなくて、おもしろいをキーに自分で学習して自分で育ってきたそのままを引き継ぐというコンセプトを、自分なりの、自分が育つコンセプトにすることは、誰ともケンカするようなことではないので、やろうと思えばできる。
もし自分に子どもがいれば、少しの協力をすることができる。もし、自分が大人になっていたとしても、いまからだと遅きに失しているといったようなことでもない。今日からでもやればよい。
自分で育つコンセプトなので、自分で学習することを身に着けないとどうにもならない。
最も大事なことは、お手本である。
最近、特にスポーツ界で目立つのだが、親との二人三脚的にスキルを高めていく選手が多い。もちろん、ずっと親と一緒にやっているわけではなくて、あるグレードに達するまでなのだが。
どのスポーツにおいても、必ず、お父さんやお母さんが導いたと言われる選手がいる。親ではないのだが、親同然に、幼い頃から、二人三脚で技を磨いてきた選手もいる。
一般的に、教え育むことを勉を強いて行うというコンセプトのように見え

る。
ながく続いた武士の時代には、当然ように、受け継がなくてはならなかった。
現代でも、歌舞伎の役者の人や古典芸能の人達は、みんなこうなっている。
昨今は、政治家も、二世三世の方が多い。
医者の世界では、江戸時代より以前から、この流れが確立している。
教育は、２０１３年では、豊かになるためのお墨付きをいただいているかのような役割になっているようだが、豊かになるお墨付きとて、受け継ぐ兆候が顕著になってきている。豊かになるお墨付きで豊かになっていないと、教え育むことを勉を強いて行うことに、多大なお金がかかってしまうからだ。
二極目の生活者などは、こんな風潮とは無縁に暮らしたがっている。
日本は、ますます、一極目の生活者と二極目の生活者に分かれていく。
一極目の生活者は、後継的になる。
豊かになった社会では、必ず、こういう風潮になる。先に豊かになったヨーロッパを見ればわかりやすい。
ここでちょっと考えないといけない。
親との二人三脚でやっていることが、教え育むことを勉を強いて行うというコンセプトであるのかどうかだ。
アイススケートの選手だったお母さんは、子どもをアイススケート場に連れて行くことは簡単にできる。野球の選手だったお父さんは、子どもが、それなりに成長したら、キャッチボールをしたくなる。いちいち書いたら書ききれない。
ここで、おもちゃ箱の話しをむし返していただくとわかりやすい。
武士に生まれたオトコの子は、教え育むことを勉を強いて行うというコンセプトのように、次第になっていく。今日は疲れているからキャッチボールをしたくないと言っても、許してもらえない日が来るかもしれない。
確かに、こうなるのだが、一方で、お父さんが野球の選手でなかったら、キャッチボールなどしなかったかもしれない。
お手本がいなかったら、学習は成り立たないので、お父さんと二人三脚でやっていることが、教え育むことを勉を強いて行うというコンセプトなのか、おもしろいをキーに自分で学習して自分で育つのか、わかりにくい。

おもしろいをキーに、自分で学習して自分で育っていくことを、自分なりの新しい考えにしようとしているのだが、それとて、最も大事なお手本については、お母さんかお父さんが手助けしないと難しい。
時々、兄や姉であったり、おばさんであったりおじさんであったりする。
おもしろいをキーに自分で学習して自分で育つ場合の、親や兄姉やおばさんおじさん達は、お手本に過ぎない。かれらが、あるグレードに達するまでのお手本である。その場合は、おもしろいがキーになっているので、おもしろくないことがあったら、終わりになる。
「あんたお父さんのようにできないの？」
こんなことをお母さんに言われると、意欲が萎える。
教え育むことを勉を強いて行うは、かれらの意欲などおかまいなしだ。おもしろいとかおもしろくないとかは、不謹慎になる。
「３６０日は毎朝一緒に走ってるけど、昨日と今日はなんなの？」
「明日はゼッタイに走るんだからね」
これは、教え育むことを勉を強いて行うことなのか、おもしろいをキーに自分で学習して自分で育つことなのか、わかりずらい。
しかし、次第にはっきりしてくる。
「あんた１番になってよ？」
「昨日より１秒速くなった」
この２つが典型になる。
教え育むことを勉を強いて行うは、よろいを誘ってしまうことが、ほとんどである。親や兄弟や親戚やコーチなどの、お手本だった人のよろいである。残念だが、かれらは、その大人のよろいに押し潰されることがほとんどである。
「あんたの偏差値ってなんなの？」
こういわれはじめて、お手本からも諦められる。
おもしろいをキーに自分で学習して自分で育つことでは、親や兄弟や親戚やコーチは、単なるかれらのお手本だから、「あんたの偏差値はなんなの？」といったことは言わない。
「おまえのバッティングはなんなんだ」
こんなことも言わない。

もう１度、おもちゃ箱をひっくり返す話しの戻っていただくとよいと思う。
自分が野球の選手だったから、息子にも野球の選手になってもらいたい話しはわかるのだが、やはり少し違う。
お父さんは、息子のお手本しかできない。あたりまえのことだ。
もっと、息子さんが、自分がおもしろいと感じることが、世の中にはたくさんある。
もし、教育について、自分なりの新しい考えでやりたければ、自分は、お手本に徹するしかない。やるのは、かれら自身でしかない。もう１人の、尊重すべき人だ。
お手本の話しは、教え育むことを勉を強いて行うコンセプトでも重要だし、おもしろいをキーに、自分で学習して自分で育つコンセプトでも大事である。
しかし、決定的に異なることもある。
もちろん、教え育むことを勉を強いて行うことは、よろいの形成が目的だったりする。人としてのあるべき姿の形成がスポーツマンシップではないかと言った正論だって、金メダル何個目標がないと、強化予算を削られてしまう現実の前には、かき消されてしまう。
「うちの塾の偏差値が上がって経営的にやっていけるようになった」
こういうシナリオもあったり、「世界の中の日本の子どもの知的レベルが落ちてきている」という議論も盛んになって、カリキュラムが変わったりする。
人としてあるべき姿の形成が教育の目指すことではないかといった正論なんかは、もうとっくの昔に消えている。
明らかに、人としてあるべき姿を目指すことは、個人にゆだねられている。
予算などつかない。
ホントは、これでいいのだろう。
もともと、８家族と柵の物語から、人の集団化ははじまった。国家ははじまった。最初は、誰でもが、自分のことは自分で考えた。
そのうち支配者が強くなって、「私の考えを植え付けたい」になっただけだ。
人としてあるべき姿の形成が、２０１３年の日本のように、個人にゆだねら

れてきた時、この、お手本の話しは、重要になる。私自身も、人としてあるべき姿になっているかどうかである。
私は、気がついているから、こんな文を書いている。自信はあるが鼻は高くはない。

○人としてあるべき姿のお手本
最近、日本人は、オリンピックで金メダルを取るような人は、人としてあるべき姿の人でもあるという神話のようなものが、壊れてきているのを知っている。
偏差値の最高に高い人達が入学して教育を受けたのだから、人としてあるべき姿の人であるといった神話も、崩れたことを知っている。
そもそも、最初から、別モノなのだが、日本の人達は、信じていたかった。
横綱になったんだから、人としてあるべき姿の人だろうと思ってしまう。
もちろん、両立させている人が多いから、神話が崩れたと言ったら、お叱りを受けるかもしれない。
しかし、これは、ハナから別モノである。
偏差値が最高に高いことなどは、その人の、単なる特徴に過ぎない。特長でもよい。素晴らしいことだが、特長である。その特長があるから、人としてあるべき姿の人であるとは限らない。
図らずも横綱になってしまいそうだから、人としてあるべき姿を模索したいと考えるのだったら、グッドである。
図らずも、オリンピックで金メダルを取ってしまったから、人としてあるべき姿も模索してみようと思うのだったら、グッドである。それもグッドだ。
しかし、一般的には、金メダルはよろいの方向に向かってしまうことも多い。せっかくの、人としてあるべき姿を模索するチャンスでもあるのだが。
もっとも望ましいことは、お手本から、人としてあるべき姿も学習してしまうことだ。時々、そんな人がいる。
人としてあるべき姿の人は、あなたが幸せだったら私が幸せだといった態度をする。
損得勘定抜きで、自分がお手本になってくれる人がいるものだ。

私は、そういう人を、曳き人と言っている。曳き人は、損得勘定などしないので、得がないが徳がある。
私は、ヒット商品の曳き人だと、鼻高々に言ったりする。すごく恥ずかしいのだが、言わないと、私に、何も相談されない人がいて困るで、言ってしまう。
ヒット商品創りなども、図らずも、ヒット商品を企画して創れるような技を、持ってしまった人がいるのだが、私の体験では、曳き人だから、あなたが幸せだったら私が幸せだという態度の人にしか、曳き人はできないと思う。
自分の固有のヒット商品のアイデアを、差し出すのだから、あなたが幸せだったら私が幸せだという生き方の人にしかできない。
世の中、飲み会で聞いたアイデアでさえパクってしまう人が多いのだ。そんなことがフツウである。
一般的には少ないのだが、たとえば、少年野球の監督とか、サッカー教室のコーチとか、ピアノ教室の先生とか、スイミングスクールのコーチとか、
コーチの技もすごいのだが、人としてあるべき姿の人であって、かれらが、それをお手本にしてくれることが、望ましいとは思う。
なかなか、そういう人には、お目にかかれない。
フツウの生活の中で、人としてあるべき姿を会得することなど、すごく難しい。まず、そんなことよりも、社会の中で埋もれて暮らさなければならないところから脱したい。自分の特長を磨かないといけない。
フツウはそう考える。
たとえ、ほんの少しのことであっても、特長があると、使ってくれる人もいる。
だから、ものごころがつくと、それまで、おもしろいをキーにして自分で学習して自分で育っていたのに、急に、３年生の統一試験を受けてみたりする。偏差値の方向へシフトをはじめる。
なんたって、豊かになるお墨付きをいただかないことには、お父さんやお母さんのように、豊かには暮らせない。
こうして、こころのよろいのウエイトが高くなってしまう。どんどん高くなって、こころの80％はよろいになって、残りの20％が愛になる。

日本だけではなくて、世界の人のこころは、これがフツウである。
愛が50もあったら、あなたの幸せばかり考えていて、販売目標を、なかなか達成できなくて、上司に怒られるかもしれない。
翌年は、お返しがあって、１８０％の達成率であっても、すでにして、担当替えをさせられた後だろう。
なかなか難しい。
やっと、人としてあるべき姿を、一瞬であっても考えることができるようになると、グッドだ。
こんな自分ではまずいのではないかと感じてくるようだとグッドだ。
フツウは、なかなか、こういう心境にはなれない。立ち上がれないほどの辛苦を味わって、気がつくことかもしれない。大きな後悔の後にくるのかもしれない。
ホントは、人としてあるべき姿を、自分もしていた。ゼッタイである、あかちゃんの頃だから覚えていない。自覚もない。よろいがゼロだった。パクリなんて言葉もない。競争という言葉もない。
人は哀しいけれど、ものごころついてからの少なくとも10年くらいは、どうにもならなくなる。
どうにもならないという意味は、得しか追わなくなる。著名になることしか追わなくなる。名刺に特長を書きたくなる。
よろいが仕事をするのだと勘違いして、何年も暮らす。何十年かもしれない。一生かもしれない。間際に、心に描いていた出来事に、表彰されなかったことを心残りにする人もいるだろう。
どこかで、人は、人としてあるべき姿を考える瞬間を持てるとラッキーである。
なかなか、難しい。
やはり、お手本である。
人としていかに生きるべきかも、お手本次第だ。

○自分で学習するを助けるモノ

おもしろいをキーにして、自分で学習して自分で育とうとすると、コンセプ

トとお手本の次に、モノも欠かせない。
教え育むことを勉を強いて行うことは、教材が与えられる。自分の意思ではないのだが、勝手に教材が与えられる。
そもそも、あなたは、大人の未発達な人だから、自分が学習するためのモノであったとしても、何が良いか、選ぶチカラはもちろん、権利もないと言われているようなモノだ。
江戸時代の藩では、藩の子弟に、藩の考えを植え付けるために、藩独自の教材を、一律に与えたのだろう。
吉田松陰が長州藩の教材とは別のものを、子弟に与えては困る。長州藩は困るし、江戸幕府も困る。支配者である江戸幕府の考えを植え付けることにふさわしい教材を与えないと困る。
教え育むことを勉を強いて行うコンセプトでは、２０１３年になっても、吉田松陰の時代と変わらない。
２０１３年では、教え育むことを勉を強いて行うコンセプトでは、豊かになるお墨付きをいただく手続きになっているから、世の中のカリキュラムが、みんなそうなっている。
そうなっているではわからない。
就職することに有利になるようなカリキュラムである。就職しないと豊かにはなれない。
50年くらい前の日本では、豊かになりたくて必死に働いた人がたくさんいた。段ボールの床に寝ても、必死で新製品を開発した。開発しないと、明日暮らせなかった。
２０１３年には、みんな大きな船になっている。最近、大きな船を、少し小ぶりにリストラしないと、船の運航が、うまくいかないようになった。
あたりまえなのだが、ここ20年くらい、ヒット商品が日本から出なくなっている。
もっと、リストラをして、船を小ぶりにしないとムリである。
そもそも、もう、人材が難しい。
大きな船の船乗りをみんなで目指しているのだから、錨の上げ方の専門家だったりして、船大工ではないのだ。
今必要なのは、船大工だ。すごいヒット商品だ。電車でも音楽が聴けるパラ

ダイムを達成したヒット商品のようなモノが、日本から出ないといけない。
それしかない。市場経済社会だから、唯一、道はこれしかない。
すごく難しいと思う。
みんな違うことをやっている。
今必要なのは、冷蔵庫のような屋内発電装置だ。もう、日本列島を明々と照らしてしまうような、インフラとしての電力列島の考えは難しい。いずれ、すべての燃料が枯渇する。
どうして冷蔵庫は電気屋さんで売っているのに、発電機が電気屋さんで売っていないのか、わからない。
太陽光パネルとその冷蔵庫のような発電する蓄電装置があれば、１人暮らしのＯＬだったら、それでやっていける。
引っ越しする時には、その太陽光パネルと発電もする蓄電装置は、忘れずに、持って行かないといけない。
こんなことを考えて実行する人がいなくなったと言っている。
人は、やはり豊かになったらおしまいである。
だから、人間の歴史には、一旦豊かになったら、必ず滅んでしまって、再生した都市や国家がない。
豊かになったら、思考が違ってくる。
同じ人間なのに。
おもしろいをキーにして、自分で学習して自分で育つためのモノの話しだ。
教え育むことを勉を強いて行うように、教材は、タダで、国家から与えられるようなものではない。ただ、教え育むことを勉を強いて行うこととケンカしない条件で、この話しを進めているから、オレは、教材はいらないとか言わないことだ。
他に、自分で独自に、自分が育つためのモノを開発しても、誰も何も言わない。
２０１３年には、インターネットがすごい頼りになる。
もし、かれらの曳き人を、少しはやってやろうと思うのだったら、幼稚園では、コンピューターが使えるように、促すことが望ましい。
お母さんに、今日のスケジュールを、保育園児なのに、ＰＣメールをして出かけると、おもしろい。かれらは、例外なく、それをおもしろいと思う。な

ぜなら、誰も、拒否しないからだ。彼らが怖いのは、「ダメ~！」の一言だから。
ひょっとして、おかしなメールを開いて、とんでもないことになる可能性もある。だからダメだと言ったら、教え育むことを勉を強いて行うコンセプトと何も変わらない。
『わたしと私』の小説の中では、５人の子ども全員が、自分のホームページを持っている、もちろん会社も持っているのだから、あたりまえなのだが。
最初の頃、長男が、20万円の商品を２万円と間違えて買ってしまった。
わたしは、社長でお金に苦労はしないのだが、その通信販売の会社が、返品を受け付けないことで、大ケンカをした。長男は謝るしわたしも謝るのだが、誰にでも間違いはある。わたしは、徹底してどこまでもやるのだ。お金の問題ではない。子どもが、怖がって、インターネットを閉じてしまうことを嫌っただけだ。
最悪、お金で解決つけられることは、世の中では、たいしたことではないことを知らせたかった。
私の、『わたしと私』の小説の中の話しだ。
保育園児で、パソコンを駆使して、インターネットを辞書がわりにしている子どもを知らないので、私の小説の物語を使っている。
おもしろいをキーにして、自分で学習して自分で育つコンセプトを貫くには、２０１３年には、ＰＣを駆使して、インターネットを活用することが、望ましい。それは、幼稚園や保育園の時期にやってくる。
だいたい、幼稚園や保育園までは、教え育むことを勉を強いて行うというコンセプトは、大きな勢いで、かれらの中に入って来ないからだ。
確かに、この時期からＰＣでインターネットを使うコトはリスクはある。だからダメを出したら、自分を自分で育てるツールを失うことになる。
何があっても、ゼッタイ的な味方が、保育園や幼稚園のかれらには、欠かせない。
何もしないでほっておくと、湯水のように、教え育むことを勉を強いて行うコンセプトの考えが、流れてくる。

自分で育つ

○**60**年くらい前のこと

最近、大きな会社が、みんなリストラをはじめている。社員が10万人とかになっている。人件費をちょっと計算してもタイヘンな金額になる。どうしてこんなに会社がデカくなったのか、不思議ではある。
それほど日本の会社はすごかった。いくつもいくつも、新しい日本の会社ができて、みんな新製品を次々につくって、次々に新しい工場を作った。
再び、同じような時代が来るのだろうか。どうしたらいいのかわからない。
今は、あまりにも会社が大きくなり過ぎて、新製品はできず、リストラをして、工場を売却しないといけなくなっている。１社だったらわかるのだが、多くのデカイ会社が、みんな同じようなことをしている。
何が変わってしまったのかは、はっきりしている。
たった50年とか60年くらい前の日本では、少し前の上海のようだった。明日暮らせない人が多かった。必死に新製品を作らないと、明日のごはんが買えなかった。世界を走り回って、生産する商品の注文をいただかないと、会社がやっていけなかった。生産の技に長けていた。
たった50年の間に、そんな人はいなくなった。少しの時間を惜しんで、アイデアを聞きに行った。自分が、エライ人などとは思わない。新製品ができるとうれしいのだ。
現在の大きい会社の最初のほとんどの社長は、そういう人だった。時々は、一流ホテルで浴衣で歩いてヒンシュクをかったりした。
一方で、教え育むことを勉を強いて行うことが強力になっていって、大きな船になっていった会社の運転ができる人材を、たくさん生み出した。
10年20年が経過して、気がついたら、日本は、すごい豊かな国になっていた。
教え育むことを勉を強いて行ってきた人達は、礼儀正しくて、常識人である。知識人である。わきまえる人でもある。
大きな船の船長は忙しい。出港の際には、いつも出向いてあいさつをしない

といけない。以前の社長は、そういうメンドーなことは、陰のスタッフに頼んでいた。
私なども、まだ30の頃に、商品を考えることが何より好きな社長の、あいさつの原稿を書いていた。私は、これでいいと思っていた。今でも思っている。
そのころから市場経済社会だったから、お客さんである生活者と商品が、社会の主役である。
会社の社長が商品がわからなければ、会社は、何をしたらいいのかわからなくなる。
あたりまえのことだ。
イベントのあいさつのことなどは、私のような者が考えればいい。少しの時間読むだけだ。
しかし、２０１３年の大きな船の船長は、イベントのあいさつが主業であったり、大きな船を動かす組織の集まりであったりで、誰も、新製品のことなど考えない。
逆転したのだ。
社長は、商品を考える人だったから、私のような、社内運営の陰のスタッフを必要とした。最近でも、サンフランシスコの田舎風のおじさんも、同じだった。多分、会社運営の陰のスタッフで、口の固い人がいただろう。できるだけ、サンフランシスコの田舎風のおじさんに、新製品を考える時間を与えてくれる人だ。
社会は市場経済社会だから、生活者を大事にして、生活者が待ち望んでいる新製品を創らなければ、会社は、存在意義を失ってしまう。
２０１３年の昨今の会社が、どうしてリストラしなければならない事態になっているのか、答えは、はっきりしている。他の答えなどない。そして、会社は、市場経済社会の細胞だから、会社がおかしくなれば、日本の市場経済社会もおかしくなる。
日本の市場経済社会には、魅力はなくなった。電車でも音楽が聴けるようにしたのは、日本の会社である。
こんなすごいパラダイムを、生み出せなくなっている。人材が変わってしまった。

こういうことは、感性だから、船の舳先が右10度に変えたいと考えるような人が、社長をやってはいけない。船の運営などどうでもいい。確かに難しいけれど、そんなことより、生活者が望む新しい生活のシナリオライターを生み出さないといけない。船の運転など、陰のスタッフに任せればよい。
江戸幕府も、ながい時間の間に、幕府運営が主たる業になってしまった。３００年も続く間に、朽ちていく。幕府運営など、陰のスタッフに任せていたのだが、社長はなにをするのか、はっきりしなかった。
２０１３年の社長は、はっきりしている。市場経済社会の生活者が、新しい生活を望んでいるのだから、生活者に先んじて、新しい生活のシナリオライターを提案することだ。
確かに、会社は大きくなっているから、運営が難しいのだが、そんなことは、教え育むことを勉を強いて行う体制の中から、多くの人材が出ている。任せればよい。
逆はない。
２０１３年の生活者が望んでいる新しい生活を、会社の持てる力を発揮して開発しないと、明日はない。ほっておくと、物資になっている昔のヒット商品を生産し続けるしかなくて、またもや縮小均衡をしなくてはならなくなる。
日本の社会は、経済的に滅びている。一旦豊かになったら滅びてしまう、人間社会の掟のようなものにはまっている。
人が、豊かになるためのお墨付きを目指してしまったのだから、取り返しがきかない。
人材がいないのだ。
２０１３年も日本の社会は、教え育むことを勉を強いて行うことがあたりまえのようになった人しかいない。
江戸時代も同じだったから、これが当然なのだ。
50年か60年前のことが異常だったのかもしれない。
終戦後に、連合軍によって与えられた、少しの解放感などは、日本になかったものだ。
「あなた達に支配者はいない」
こう、急に言われても困ってしまう。美濃の殿様のような人が、日本には

ずっといた。はじめてのことだった。
人は、少しの解放感があって、拒否するものが何もなければ、こうなるという典型を、日本社会はやったことになる。生活者が生まれた。
みんながクリエイティブになった。
教え育むことを勉を強いて行うことの体制が整うまで続いた。日本社会の、竹が勝手に茂ってしまう状況を、危ういと考えてしまう、船の船長的人達の考えは、日本の中に風土として浸透しているので、次第に、日本社会は、江戸時代の風土に似てくる。安定した船の運航である。
キーワードは、ふさわしいだ。
ひょっとすると、世界１の経済大国になるかもしれないので、ふさわしい人材を育てないといけない。作業服で汚い試作品を社長室に持ってくるような社長では困る。いつまでも、中小企業感覚では困る。こう思われてしまった。ふさわしくないである。
２０１３年には、生活者は、会社に何を期待したらいいのかはっきりしなくなった。危機である。
生活者が、暗黙のうちに会社を信頼したのは、電子レンジのようなすごいものを、生活にプレゼントしてくれたことだ。テレビもそうだ。最近では、スマホである。
こんなことを、次々にやってくれなかったら、会社は何なのかわからない。
３年くらい、何も新製品が出なければ、会社がなくなったかのうようにイメージされてしまう。
あたりまえである。
難しいと思う。
日本の会社は、世界トップを走るにふさわしいを追ってきたから、ふさわしくなくてもヒット商品を創れる人などいなくなっている。
教え育むことを勉を強いて行うコンセプトでは、豊かになるお墨付きを与える仕組みになっていて、この、豊かな社会の船を運転するにふさわしい人が選抜されている。
紀元前の都市国家でも、同じことが起って、知識人が残って知恵者がいなくなった。
２０１３年の日本でも同じである。

豊かになると、人間社会は、同じことをして滅びる。
50年か60前の、豊かな社会にはふさわしくないかもしれない知恵者が多く輩出したのは、教え育むことを勉を強いて行う体制がまだできなくて、おもしろいをキーに自分で学習して自分で育たなければならなかったわずかな時代の出来事だった。
それがすごかった。
２０１３年に、それを再現しようと思ってもムリである。

○いたちごっこ
私は、アキバの娘達が、２０１３年のヒット商品だと思っている。もちろんスマホもだし、スマホで使うゲームもだ。
すべてのキーワードは、おもしろいである。
２０１３年では、日本の中で、人の身体に染み込んでいる、おもしろいを発揮させるには、コンテンツを仕事にする以外には、ないかもしれないと思ってしまう。
教え育むを、勉を強いて行うコンセプトの範疇に入らないからだ。
一時期、エレクトロニクスなどは、教え育むを、勉を強いて行う範疇になかった。教え育む人などいなかった。
２０１３年には、日本の教え育む仕組みに中に、エレクトロニクスは、カリキュラムだけではなくて、規制や、資格の取得など、多くの、世界トップにふさわしい仕事が存在する。
こうなったら、もう難しい。
日本のエレクトロニクスから、生活者が、「ありがとう～！」と感謝してくれるような、新製品を出すことは難しい。
エレクトロニクスの人達は、豊かになるお墨付きを得ることが大事だから、リスクのある、成功しないかもしれない、生活者が３年後に望むであろう新製品などに、手を出さない。
サンフランシスコの田舎風のおじさんとは、逆なのだ。
サンフランシスコの田舎風のおじさんは、お墨付き等どうでもいいのだ。自分の中の、おもしろいを発揮できなかったら、生きている時間がもったいな

いと思う。
エレクトロニクスのことだけを言っているのではない。食べ物の人達は、豊かになるお墨付きを得ることが大事だから、リスクのある、成功するかどうかもわからないことには、手を出さない。
みんな、教え育むを勉を強いて行う体制ができると、もう、みんなが目指すことが違ってきてしまう。
豊かな社会だからだ。
食べ物でも、２０１３年では、コンテンツ時代である。無限にある、料理の組み合わせを探っていくことには、おもしろいが残っている。
アキバの娘達やスマホやスマホで使うゲームなどのコンテンツの仕事も、そのうち、教え育むを勉を強いて行う体制ができてしまう。カリキュラムもできてしまう。
そしたら、規制ができて、業界団体ができて、運営が大事な、フツウの船になってしまう。
おかしな話しなのだが、いたちごっこになっている。
教え育むを勉を強いて行うことが何であるのか、よくわからなくなる。
よくわからないというより、豊かな人へのお墨付きをいただく手続きになっている。
原発の産業は、おもしろいからといってだれかがはじめたものではない。スマホとは異なる。
原発は、国家の成長戦略のようなものがあって、国家の研究所で、粛々と研究されて、事業開発されてきたものだ。電力会社も、会社なのだが、スマホを開発する会社とは異なっている。
国家予算が、研究や開発に注がれることが大きく違うところだ。
福島の事故以来、もしかして、日本では、原発産業は、産業として成立しないかもしれないと思えるようになってきている。
どうして発電産業が、原発産業に特化してしまったのか、よくわからない。
原発の技術が、多くの大学にカリキュラムとしてあって国家予算が使われいるのだが、自動車のようには、うまくいかないかもしれない。
教え育むを勉を強いて行いたい人達は、日本の将来の産業として選択したのだが、供給経済社会ではないので、難しいかもしれない。市場経済社会は、

生活者が支配者だから、わたしはイヤだ！と言ったら、難しいことになる。
原発は、生活者におもしろくないというか、感心してくれない。
しかし、電気をつくることは、私もおもしろいと思う。生活者もおもしろい。生活者に、こうすれば、あなたの１日分の電気はつくれますと言ったら、おもしろいからやる人が多い。
今最高におもしろいのは、発電もする蓄電装置を開発することだろう。
太陽光パネルや風力などがあるのだが、蓄電と組み合わせないと難しい。雨の日も無風の日もあるからだ。
そしたら、冷蔵庫のように、常時回さないといけない蓄電池になるので、微量であっても、発電ができる。
分散型の電気になってしまうので、大容量の電気は、会社で使うだけになるのだろうが、会社も、自分で考えればいいのにと思ってしまう。
工場建設の見積もりに、発電装置が入ることが、ホントは、フツウだと思うのだが、どういうわけだか、別になっている。
ガソリンだって、多分、10年後には、工場建設の見積もりに入ってくるだろう。
コーンの畑かサツマイモの畑があればいいのだから。
目の玉が飛び出るほどの見積金額にはならない。
10年後の話しだ。
もう、日本は、人口が減るのだから、相応のことをしないと難しい。
工場を建設する会社などは、グッドだ。
もちろん、発電や燃料なども自分で賄う工場だ。
こんなことは、教え育むを勉を強いて行うコンセプトには、しばらくはならないので、いたちごっこの先を走れる。
私は、微力ながら変革者もやっている。会社の変革者だ。私が変革者をやる時は、常に、武器は、その会社では不得手なことにする。
たとえば、食品を、１度も事業にしたことがないのだが、私は、あえて選択する。
変革者は、敵をしっかり見極めていないと、とんでもないことになる。
変革者が変革する相手は、会社に巣食ってしまった見えざる悪魔だ。
見えざる悪魔は、会社を崩壊させるためだけに存在する。どんな会社でも、

見えざる悪魔がいない会社はない。
見えざる悪魔の崩壊のコンセプトは、純粋になって鉛筆の芯を折ることだ。
カオスがキライである。
会社も国家も、集団だから同じである。
国家が崩壊するのは、国家の見えざる悪魔に占領されたからだ。コンセプトは純粋になることだ。
カオスを嫌う。
会社でも国家でも、教え育むを勉を強いて行う意味は、純粋になっていくことでもある。
国家の教え育むが勉を強いて行うが極まると、他の民族に対して、排斥の考えになってしまう。どっちの民族が優秀かで争ってしまう。
戦争になる。
おもしろいをキーに自分で学習して自分で育つことでは、カオスを受け入れる。２０１３年には、インターネットを駆使するコトが好ましい。自分で学習する手段である。
インターネットを駆使することそのものが、すでにして、カオスを受け入れることだ。
集団が崩壊することをくい止めることが変革になることがほとんどなので、私は、ほとんど、この方法を使う。
その会社の不得手な事業に手を出す。
日本だったら、得意な、大規模インフラ事業などには手を出さない。インフラ大規模事業には、多くの見えざる悪魔が存在するからだ。戦う相手が多過ぎる。
分散型にしてインフラから外してしまう。
発電もできる蓄電装置として、電気屋さんで売ってしまいたくなる。
私の変革とは、こういう手段をとる。
会社の中においても、たとえば、このようなことを手がけると、いままで、そこで暮らしている社員や業者の方が多いのだから、こうなる前に云々と言われたりする。危ないこともある。あたりまえのことだ。既得権を壊すのだから。
私の変革の方法はこういうものだ。

だから、私は、よく承知している。
教え育むを勉を強いて行う意味は、より純粋になることだと、わかっている。
変革しなければ、集団は崩壊するのだが、教え育むを勉を強いて行ってくると、変革者などには、ならないということも、よく承知している。
豊かさのお墨付きのための、教え育むを勉を強いて行うなのだから当然ではある。

○幸福感

変革者になるために、おもしろいをキーにして、自分で学習して自分で育つ必要もない。
教え育む仕組みの中で、必死に上を目指した人ほど、大局が見えない人が多いと言っているだけだ。したがって、挑戦者や変革者とは、遠い位置にあることが多い。どちらかというと、見えざる悪魔の優等生になり下がってしまうことが多い。
教え育むか自分で育つかは、そういうことではなくて、どっちが、人としてあるべき姿に近くなるかが大事である。そして、どっちが幸福感が大きいかだ。
私は、はっきりしている。
私の幸福感は、強～い情熱を注げることが多いほど、私は幸せであり、幸福感が高いというものだ。
幸福感が、生き続けるためには、極めて重要だと思っている。今書かせていただいている『自分で育つ』は、私が、自分が育つことはどういうことなのか、信じていることだ。
『自分で育つ』は、私の強い情熱になっている。
もちろん、自分で育つの前篇のつもりで書いた『あかちゃんからの手紙』も、私の強～い情熱である。
私は、保育園の園長をやらなければ、自分が育つことなど気がつかなかった。興味もなかったかもしれない。強～い情熱になんかにならなかっただろう。

すごく感謝している。
幸福感などは、人によって様々である。
よろいが厚いと、課長の辞令をもらうと小躍りしたりする。もちろん、受験が成功したり就職が成功したりすると、幸福観に包まれる。
幸福のステージの一歩上に行ったかのように思える。
ひょっとしたら違ったかもしれないと気がつくのは、かなり後になってからである。あれは幸福を感じた瞬間に過ぎなかったと思う出来事がある。必ずある。
幸福には、ステージなるものはない。階段もない。しかし、ほとんどの人にはよろいがあるので、よろいには階段があるので、幸福の階段を昇っているかのように思える。
ゼンゼン違う。それは、単に、よろいを厚くしているだけだ。
なかなか、ここがわかってもらえない。一般的に、よろいが厚くなることを、喜びとする。それが幸福感だ。
他者の幸福観に、私がとやかく言うのは良くないかもしれない。
しかし、模型飛行に係わっている時間が最高に幸せの時間だと言われる方に、それは違うと言っているわけではない。
模型飛行機の時間によろいなどない。
みなさん、自分では気づかないかもしれないが、最高におもしろい時間を過ごせることを持っている。
仕事そのものに、最高のおもしろい時間をいただいている人もいる。
なのに、先の幸せが見えないとおっしゃる方が多い。最近は、若い人にも多い。
よろいを厚くすることが幸福のステージと思っていることが多いので、こうなってしまう。
表彰状をいただかなければ幸福感を感じないならば、それは、なかなか難しい。
残念だが、世間のシステムは、よろいが厚くなることを奨励している。お母さんは、あかちゃんの時から、娘がいただいた表彰状を部屋に飾る。
私などが、それで何なのとか言ったら、キツクお叱りを受ける。幸福感が大きいのだ。

しかし、これはよろいである。確かだ。
よろいはこころにあるが、こころの80％が、フツウはよろいで占められるのは、これでは仕方がない。愛が残る20を占めているだけだ。
私も他者のことは言えない。３０００冊も蔵書を飾ってニヤッとしていた。優勝カップは多過ぎて飾る家が欲しかった。
いきなり私は、よろいに目覚めて、３０００冊の蔵書を持って行ってもらったし、優勝カップや賞状は、押し入れにあって、私しか知らない。
私には、すべてよろいなのだ。よくよく考えてみると、優勝カップを集めたくて、スポーツをやっていたわけではない。誤解をされたくないが、いまは、おもしろいからスポーツをやったのだと信じている。
おもしろいは、人が誰でも備えているチカラだ。フツウは、おもしろいは、隠してしまう。大人げないとかふさわしくないといったよろいで隠す。
私は、ある時点からよろいを脱ぎにかかったので、おもしろいが、再度表に出てきた。
私の幸福観は、強～い情熱を注げることがたくさんあることになった。
私は書を、電子書籍で本棚に並べていただいているのだが、「あなたは何者ですか？」と、時々言われることがある。
書のタイトルだけでも眺めていただけると、どうしてそんなことを言われるのかわかっていただける。
私の幸福観からきている。私には、強～い情熱を注いで研究したりしていることが多い。書として創作する気というより、商品創作に気があった。
私の中で、強～い情熱が溢れてしまうと、書として創作したくなって、本棚に並べていただける書店を探してしまう。
当然のことながら、商品としても同じようになるので、私は、食の研究者かクスリの研究者かコスメの研究者か電気屋さんなのか紙屋なのか、お茶だったりするし、そして、経済屋であったり会社の経営屋かもしれないと思われたりもする、私はフツウなのだが、私を知っていただく人は、「あなたは何者ですか？」になってしまう。すべて、私の幸福観からきている。
私のよろいを厚くすることが幸福観であるならば、カオスのようにしないで、鉛筆の芯を研ぐように、何かを極めた雰囲気を醸し出した方が、パフォーマンスとして好ましい。お金になる仕事も多くなる気がする。

それでは、私の幸福感を満足できないので、特定の何かを極めた雰囲気にしない。そもそも、特定の何かを極めようとしたら、数多くの周辺を極めないとウソになることも知っている。
極めるとは、そういうことだ。
私の幸福観を話しても仕方がない。
ただ、私は、何を目指して育とうとしてるかを知っていることが大事である。
人としてあるべき姿を目指すことが大事で、私自身の幸福観にそわなかったら苦しい。毎日のことだからだ。
毎日お金の計算が楽しみで幸福感があるのだったら、それはよろいだが、人のあるべき姿ではないと私が言っても、難しい。いつか崩れると言っても、嫉妬にしか聞こえないかもしれない。
これは、豹にはない人がこころを持っているから故の出来事である。
私の姿勢ははっきりしていて揺らがない。

○自分で育つ

日本の常識的な、教え育むことを勉を強いて行うというコンセプトと張り合うことではなくて、おもしろいをキーに自分で学習して自分で育ってきたそのままを引き継ぐというコンセプトを、自分なりの、自分が育つコンセプトにすることは、誰ともケンカするようなことではないので、やろうと思えばできる。
私は、幼い時から、自分が生きることなのに、既成のエスカレーターのように道が定められていることに、ある種の疑問を持っていたことは確かだと思う。
しかし、それが何であるのか、私はわからなかった。それが正しいことであるのか間違っているのかではなくて、自分なりの解を発見しなければ、その定められたエスカレーターを拒否するのか反発するのか、自分の行動として発揮できない。
私が、保育園の園長をさせていただいたのは、ずっと後のことであり、自分なりの、人としてのあるべき姿を見たのは、遅くなってからだ。

しかし、私は、30才を前にして挑戦者をやったり変革者をやっていた。
おかしなもので、変革者などは、いつ何時自分が消されるかもしれない覚悟を持たないとできないのだが、自分のあるべき姿を確立できないのに、変革者をやっていたことが、不思議ではある。
ことばが成立しただけで、見えない糸は繋がっていて、後になって修正したわけではない。
「あなたが幸せだったら私は幸せだ」
こういう態度は、30くらいの時から現在まで変わらない。
こんな言葉も、30くらいの時は、言葉として発してはいなかった。しかし、態度は、こうだった。
「あんたに何のメリットがあるのか」
こんなフツウのことを聞かれて、すごく考え込んでいただけだ。30才の頃だ。
どうも、私の話しになってしまってよくない。
２０１３年においても、日本の社会には、教え育むことを勉を強いて行うという風土が根付いている。途中経過に、グレードの踊り場のお墨付きがあって、もっと上を目指すように促されている。その上が何であるのかは明らかにされてはいないのだが、豊かさのお墨付きであることは確かだ。
履歴書なんかには、必ず、お墨付きの経過を記入する。
いいとかワルイではなくて、日本の社会の、幼い頃からあるエスカレーターは、日本の、すでに立派に存在する、船の、乗組員のエスカレータである。
すべての、教え育むことを勉を強いて行うことが、こうなっている。
入学と言って就職と言う。
いくら船の運転が上手な人ばかりが集まっても、活力のある船にはならない。
確かに運転手は大事なのだが、船大工が大事だ。経営社会や経済社会は、船大工が大事だ。新しいモノやコトをつくらなくては、陳腐化してしまう。沈まない安全運転だけがグッドではない。
２０１３年の日本社会で豊かになろうと思うと、社会が豊かだから、沈まない船の乗組員になることがベストだ。
就職活動などは、みんなこのコンセプトだ。

残念だが、このままの人材しかいないのであれば、日本の社会経済は、滅びるしかない。
新入社員で社会に入社しても、運転しかできない人がいくら集まっても、船の陳腐化を止められないし、新しい船など建造できない。
残念だが、日本社会は、難しい。２０１３年でも、まだ日本社会は豊かだから、みんな、豊かになるエスカレータに乗ることしか考えていない。他のエスカレーターなど用意されてはいない。
もし、この用意されているエスカレーターに疑問を持つのであれば、あるいは、このエスカレーターだけでは足りないと考えるのであれば、自分で、教え育むことを勉を強いて行うというコンセプトと張り合うことではなくて、おもしろいをキーに自分で学習して自分で育ってきたそのままを引き継ぐというコンセプトを、自分なりの、自分が育つコンセプトにすることは、誰ともケンカするようなことではないので、やろうと思えばできる。
人間社会は、こういうものだと理解できるかどうかだ。
完璧ではない。
２０１３年の日本の社会の大勢は、２０１３年の世界の人の中の日本の人の役割のようになっている。
以前は、日本社会は、世界の人のお手本だった。勤勉で働き者で挑戦的なクリエイティブさがあって世界に新しい生活のシナリオライターを届けていた。豊かになるお手本だった。
他者を思いやるこころや分かち合いのこころもお手本だった。
２０１３年には、挑戦的なクリエイティブさを、世界の人は、日本の人に感じなくなっている。多分、２０１３年以降も、ずっとこうだろう。
日本から、電車の中でも音楽が聴けるような、パラダイムの転換意欲が消えてしまった印象になるだろう。
理由は、２０１３年の日本の人々は、依然として、豊かな人を目指した何本ものエスカレーターに乗るからだ。船長を目指している。
船長は大事だが、挑戦的なクリエイティブさを併せ持つことは難しい。
人間社会には、変えがたい定まったものがある。人間に用意された罠だといってもよい。例外なく、その罠にはまってしまう。
人間社会は、一旦豊かになってしまったら、必ず滅んでしまうことだ。

大昔から、ずっと続いてきていることだ。豊かになった社会は、数え切れない数になるのだが、２０１３年にまで繋がっている豊かな社会はゼロである。近年では、２時間で世界を１周できるから、「あんたが滅ぶと困る」と会議などで集まって決めて、滅ばないまま縮小均衡を求める。世界社会が求めるので、滅びることは少なくなるのだが、存在感では、滅びの印象になってしまう。
これは、経済社会でも経営社会も同じである。大きな会社になっていても、大きな船なのだが、錨が上がったまま浮遊する事態になったりする。
人間に定まった集団行動である。豊かになったら、豊かになったふさわしさを追って、再生産も消費も少なくなって、豊かではなくなって、借財が返済できなくなって、滅びる。
人間社会の定まった罠である。
滅びを定着させるのは、教え育むことを勉を強いて行うという、人材育成の方向が、鉛筆の芯のように定められてしまうことと同義である。
人が、みんな、豊かさを求めるから、豊かな人になるシステムが完成する。
２０１３年の日本は、こうなっている。
豊かさを経過すると滅びるのだから、それが例外のない人間の定めなのだが、１９９０年代に豊かさのピークに達した日本社会が、２０１３年には、何が起っているのか、よく見極めないといけない。
もしかして、日本社会全体が、一つ目の信号で留まっているのかもしれないと感じてもいいのではないか思う。
教え育むことを勉を強いて行うというおかしさに気づけばグッドだ。人間の生き方の細い路地を奨励されているのかもしれないと感じれば、グッドだ。自分で育たなければ私はダメになると感じれば、グッドだと思う

○自分で育つことはできるのか

おもしろいをキーに自分で学習して自分で育ってきたそのままを引き継ぐというコンセプトを、自分なりの、自分が育つコンセプトにすることは、誰ともケンカするようなことではないので、やろうと思えばできる。
具体的にどういうことになるのか、私の『わたしと私』の小説から引用する

しかない。
現実には、いらっしゃるのだろうが、私が知らないから、仕方がない。
『わたしと私』は、１９９２年の夏の暑いに出会った、わたしと私の物語である。わたしが、食品の大学を出て、会社に入って、マーケターをやることになったのだが、いきなり企画という仕事が多くなって、さっぱりわからずに、私のオフィスに教えてくれとやってきた。
２０１３年のわたしは、５人の子どもの母親でもあり、２万７千人の社員のいる会社の社長でもある。
世界企業なので、世界を飛び回っている。
５人の子どもの３番目のオトコの子は、ゆうである。家の近所の公立の小学校に通っている。３年生である。
フツウの小学校３年生で、教え育むを勉を強いて行うことに、毎日出かけている。疑問は持っていない。
一方で、ゆうは、大学の研究生でもある。大学で、研究室を持っている。金魚のロボットやモグラのロボットなど、多くのロボットを試作して、その世界では有名である。だから、大学で研究することになった。２０１３年は、ハチ鳥のロボットを開発中で、もうすぐ終わる。自動制御で、自分で、壁にぶつからないように制御して、映像を送る。すごく小さいので、どんな隙間にも入れる。飛んだ履歴を覚えていて、帰って来れる。
ゆうの大学でのプレゼンテーションの時には、会社の人やロボット工学の学者や学生で、満員だった。
ゆうは、だから、どうということはない。ただ、おもしろいからやっている。
２０１３年３月１日に、ゆうの会社ができる。ロボット試作依頼が多いからだ。
ゆうは、月曜と火曜と水曜は、近所の小学校に行って、木曜と金曜は、大学の自分の研究室に行く。
わたしは、難しいことはわからないので、ほとんど、ゆうに聞いてしまう。親子なのだが、１対１である。
『わたしと私』の私は、ゆうが、おもしろいをキーに、自分で学習して自分で育ってきたそのままを引き継いで、自分が育つことに達してくれればいい

と願っている。
「あなたが幸せならば私が幸せだ」
ゆうは、家族だけには、まだ小学校３年生だが、できている気がする。

『自分で育つ』

２０１４年初春

げんじあきら

あかちゃんについては、『あかちゃんからの手紙』を読んでいただきたい
こころについては、『こころの色』を読んでいただきたい
愛については、『愛ってなんだ』『まゆ』『こころの色』を読んでいただきたい
生活者は、『生活者が溢れるーわたしと私００５』『二極目の生活者』を読んでいただきたい
見えざる悪魔は、『人と集団を滅ぼすもの』『見えざる悪魔ーわたしと私００７』を読んでいただきたい
挑戦者は、『挑戦者ーわたしと私００８』『ソウルの縄文』『ソウルのマナティ』を読んでいただきたい
三方一両得は、『アキバの娘達と三方一両得』を読んでいただきたい
変革者は、『喫水ー変革者』『ブルーセダンとの戦いー変革者』『変革の方法ーわたしと私００９』を読んでいただきたい
おもしろいは、『おもしろいってなんだ』を読んでいただきたい
曳き人は、『夢の曳き人』を読んでいただきたい
幸福感については、『強～い情熱ーわたしと私０１１』を読んでいただきたい
よろいについては、『よろいってなんだ』『壊れるよろい』『脱げないよろい』『ルイハシのよろい』『ちかのよろい』『心棒ー朗人のよろい』『虐

待ーさじのよろい』『いじめーゆいのよろい』『無視ー太田垣のよろい』
『隆家のよろい』を読んでいただきたい

自分で育つ

著者　　　げんじあきら
＊本書は（株）ボイジャーのRomancerで作成されました。